
I S <インフィニット・ストラトス> Black and White

リフィーリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS<インフィニット・ストラトス>Black and White

【Nコード】

N1310R

【作者名】

リフィéria

【あらすじ】

【IS<インフィニット・ストラトス>】・・・女性のみが扱える世界最強の機動兵器。

それを世界で最初に扱ってしまった男【織村一夏^{おりむらいちか}】。しかし、時間をさかのぼること5年前。当時まだ10歳だった少年【如月刹那^{きづきいづな}】はISの起動に成功していた！

しかし、その特異性から世間からは隠され、影の生活を送ってきた刹那。

しかし、一夏が現れる事によって刹那もIS学園に入学させられ、
2人は出会う事になる。

この物語は、ISによって運命を変えられた2人の少年の出会い
と別れの物語である。

第1話 IS（前書き）

この作品は原作の設定を改変、あるいは原作の崩壊などが見られる場面が存在します。

そのようなものを望まない方・嫌悪感を抱かれる方・苦痛を覚える方は読まないことをお勧めいたします。

それでもいい、または『自分はそんな苦痛を感じる事に喜びを抱いている』などという治してあげたいけどなんとなく見ているほうが面白そうなので放置してみたい素敵な性癖をお持ちの方のみご覧ください。

第1話 IS

【^{アイエス}IS】と呼ばれる兵器が世に出現したのは、今から10年ほど前……そう、誰にとっても唐突で突然で、予想できない事態だった。

【IS】……正式名称【インフィニット・ストラトス】というその兵器は、開発者の『^{しののたばね}篠ノ之束』が言うには、『現行する全ての兵器を凌駕する』というといふとんでもない兵器だった。

当然、誰にも信じられず、また、そう信じるわけにはいかなかったということでもあった。

IS発表から一ヶ月が経過した時、後に【白騎士事件】と呼ばれる事件が起こった。それは事件と呼ぶにはあまりにも異常で、国家の存亡すら賭ける事態だった。

そのとき日本に攻撃可能なミサイルの総数実に2341発。それらが一斉にハッキングされ、制御不能に陥り——発射された。

当然、政府は監視衛星から入った情報を元に、アメリカ軍に迎撃要請を打診したが、ミサイルの数が異常な数であるため、とても全てを打ち落とすことはできないと考えられていた。

そこに現れたのが、白銀のISを纏った1人の女性であった。

顔はバイザーで覆われ、全身も中世の騎士を思わせる甲冑^{アイマー}に覆われていた。そしてその女性は手に持っていた剣としかいいようのない武器でミサイルの約半数1221発を切り落としたのだ。

さらに距離の離れていた残り半数を当時の最先端技術である大型荷電粒子砲を空中に召喚して撃ち落とした。

超高速による近接格闘能力。さらに粒子状のものを高速で保存・再構成する能力。さらに当時は不可能とまで言われていたビーム兵

器の実用化。それらのどれをとっても現行する兵器では実現不可能な能力だった。

当然各国もその事態をただ静観していたわけではなく、国際条約を無視してまで偵察機を出し、監視衛星の映像を確認したりしていた。当時の最新鋭の戦闘機なども投入されたが、ありとあらゆる現行兵器の攻撃を受けてもその女性の甲冑アーマーには傷1つつかず、逆に撃墜していった。

そしてその恐るべき力はただ撃墜することではなく、1人の死人も出さなかったということだ。

その日その女性がたたき出した戦火は実には長距離ミサイル2341発、最新鋭戦闘機204機、巡洋艦7隻、空母5隻、監視衛星8機という前代未聞の記録であった。

たった一日にして『究極の戦闘兵器』という称号をほしきままにしたIS。さらに篠ノ之束博士による『ISを倒せるのはISだけである』という言によって、全世界は急速に【IS運用制限条約】の締結と開発普及を促した。

こうしてISは全世界へと広がり、また唯一ISを動かせる『女性』の立場は急上昇し、逆にISを動かせない男性の立場は低くなり女尊男卑の世界が生まれた。

それから10年。男性には動かせないと言われていたISを動かした男子、【織斑一夏おりむらいちか】が世界で唯一ISを学べる学校、IS学園に入学するところからこの物語は始まる。

第1話 IS（後書き）

どうも、始めまして。人気恋愛バトル小説ISの二次小説が書きたくなったので書いてしまったりフィーリアです。

なにぶん小説を書くのが初めてですので見にくい・誤字脱字がひどいなどはございますが、お付き合いいただけたら幸いです。

一話を言っておきながらISの誕生のみしか書かれていないのは、時間が足りず、ここまでしか書けなかったからです……。実際時間があまりとれないため、更新速度も非常に遅くなると思います。が、それでもお付き合いいただける方はよろしく願います。

また、アドバイス・感想などをいただけたら嬉しく思いますのでヨロシクお願いします。

なお、前書きにある後半部分は勢いで書いてしまったためにちょっと後悔していたりしますが、スルーしていただければ幸いです・。。。

第2話 入学試験？

—— 一夏side ——

唐突だが皆に聞きたいことがある。皆は視線というのを感じたことがあるだろうか？まるで、世界中の全ての視線が自分に集まっているのを感じたことがあるだろうか？

・・・俺はある。というよりは今まさに視線を感じている。ここ、IS学園1年1組の教室で今まさに全ての人の視線を感じている。どうしてこうなったんだっけなあ・・・と思い返してみる。

・・・一月半ほど時間は遡る。

その日は2月の中旬とあってか、風が冷たく、コートを着ても肌寒い日だった。俺こと織斑一夏は、自宅から一番近い高校私立藍越学園の受験会場に行くために電車に乗って4駅ほど離れた駅へと下り立った。

「いくらカンニング対策だからって受験する高校よりも離れたところに行かなくちゃ行けないのって・・・なんか違う気がする」

俺が受験しようとしている藍越学園は、

- 1・自宅から近い
- 2・私立なのに都立・公立並に学費が安い
- 3・学力がそこまで高くない（全国平均で真ん中くらい）
- 4・学園祭が毎年ある（お祭り騒ぎが好きな俺としてはいい条件だった）

という学校で、なぜ学費が安いかというと卒業生の9割が学校法人の関連企業に就職するからだ。早く学校を出て働きたかった俺にと

つては、とても魅力的な条件だった。

「いつまでも千冬姉に頼ってばかりじゃいけないからなあ・・・」

うちにはちよつとした事情があつて両親がいない。姉である織村千冬の稼ぎによつて生活している。本当は中学を出てすぐに働きたかったが、姉の力（主に腕力）には勝てず、今現在受験生というわけだ。

両親がいないからって、別に根暗になつたり卑屈になつたりはせず、たまに仕事から帰ってくる千冬姉の教育によつて普通に成長して言つたと自分でも思う。友達もそれなりにはいたし、幼馴染や悪友といった人物もできた。

ケンカはあまりしたことはないけど・・・いや、一回大きなケンカをしたことがあつたか。

3年ほど前に千冬姉が連れてきたアイツ・・・たったの3ヶ月の間だけ一緒に暮らしていたアイツとは初めて会つた時になぜか感情が爆発した。

（あんなにキレたのは生まれて初めてだったなあ・・・）

多分、今思うとあの時見たアイツの目が、死んでいるというか世界そのものを憎んでいるというか何はともあれ黒かつたのが原因だろうとは思つ。

その後色々あつて生活していくうちに、仲良くなつたのだが3ヶ月たったときに急にいなくなった。

千冬姉が言うには『色々あつて親元に帰つた』らしい。アイツの事情というのも結局分からずじまいで、千冬姉もその後話題に出さなかつたから俺自身あまり思い出しもしなかつた。

（アイツ、元気にしてるかなあ・・・）

などと昔のことを思い出したりしながら試験会場を歩いていたのだが……

(迷った……！)

当然のごとく道が分からなくなった。

「地域出身のデザイナーだかなんだかは知らないけど、この『常識的に作らないオレかつこいい』といった感じの迷路チックなつくりはやめてほしい……」

まず案内図がない。初めて来る人に不親切なことこの上ない。さらに多目的ホールであるために他の学校の受験会場もかねているため、案内の人数まで足りず、入り口で説明する人しかない。

「もう入り口の場所も分からないしなあ……次のドアを適当に開けて、そこにいた人に場所を聞いてみるか……」

と言ってるうちにドアを発見した俺は中に入る。ちょうどいい事に理化？の先生ないし教授なのか、白衣を着た人物を発見したので道を聞いてみる事にする。

「あのー、ちょっと道を聞きたいんですけど……」

「あー、キミ受験生だよな？はい、向こうに着替えがあるから着替えてね？時間押してるからなるべく早く。あー、ここ4時までしか借りられないからやりにくいっとならないわね、まったく。上は何を考えているんだか……」

着替えまでするとはカンニング対策ってここまで大変なのかー・

・と思いながらも部屋の置くのカーテンを開けたら、俺を出迎えたのは奇妙な物体だった。

(鎧・・・いや、これはまさか・・・)

中世の甲冑のような鎧が、まるで主君に対する騎士のように跪いていた。厳密にいうと、本来一番装甲が厚いはずの前の部分が開いていて、甲冑のできそこないか壊れたものだとい瞬見間違えそうになったが、それが正しい形だとすぐに分かった。

「これって・・・ISだよな？何でこんなところに・・・」

IS<インフィニット・ストラトス>。本来は宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。が、現在でも宇宙進出が思うように進んでいないため、現在は専用の『スポーツ』用の飛行パワードスーツというのが全世界の共通認識だった。

「男には扱えないんだよな、これって・・・なんでこんなところに・・・」

女にしか動かせず、女にしか反応しない。それがISの常識。そう思って俺はISに触れた次の瞬間・・・

「ッ!？」

頭の中で音がなった気がした。そして頭の中にはISからと思われるおびただしい量の情報が駆け巡る。

ISの起動方法から制御方法、このISの性能・特性・現在の装備。さらには活動限界予測時間からセンサー精度、レーダーレベル、アーマー残量、出力限界、ext・・・。

「な、何だ・・・？まさか、動いてる？」

ISが動いていた。女性にしか扱えないはずの究極のパワードスーツが、男性であるはずの一夏に装着され、起動していた。

肌の上に直接広がっていく感触——スキンバリアー皮膜装甲展開、・・・完了。

突然体が軽くなる無重力感——スラスタ推進機正常作動、・・・確認。

ふと右手に重みを感じると、自動的に右手に巨大な近接ブレードが発光しながら形成されていた。

そして、目の前の壁が自動的に開いていく。その先にあるのは巨大なグラウンドと、真っ青な青空。そして太陽を背にしたISが見えた——。

・・・理由は分からないが、ISを起動させてしまった俺は、巨大なグラウンドともいうべき場所に浮いていた。そう、浮いているのだ。ISが自動的にやってくれているみたいだが、どうやって浮いているのかは俺も分からない。・・・どうすればいいんだろう、これは。とかなんとか思っているうちに、相手が話しかけてきた。

「えーと、それでは試験を開始します。準備はいいみたいなので、攻撃してみてくださいー」

攻撃といってもなあ・・・どうすればいいんだろう・・・と考えていると、また相手の方から声が聞こえてきた。

「・・・？開放回線オープン・チャンネルの仕方が分からないんですかー？そのまま話せばいいだけなんですけど・・・ちよつとそちらに行きますので動かないでくださいー」

と言ったのでつい、「あ、はい」と返事をしてしまったら相手の

人はひどく驚いて、

「へー？この声って・・・男の子・・・！？・・・って、わきゃあ！！」

なんでも後で聞いたところによると俺が男であるということに驚いてISのコントロールを間違えて級加速をしてしまい、壁に激突してそのまま気を失ってしまったらしい。

「えーと・・・俺この場合ってどうしたらいいんだろう」

その後は試験官が気絶したのに気づいたほかの先生やらが駆けつけてきて、俺が男であることを知ってみんな驚いて、俺はそのまま病院に連れて行かれた。

まあ男でISを動かしてしまったのだから当たり前だとは今は思うが、そのときは自分でも混乱していて、人に言われるがままに様々な検査を受けさせられた。

その後は急に黒服の人たちが現れたかと思うと、「君を保護する」とかい出し出してIS学園への入学手続きをさせられ、俺は流されるがままにIS学園へと入学した。

・・・ん？藍越学園はどうしたって？もちろん入試にこなかったのだから落ちたさ。・・・受験料がもつたいなあ・・・とは思っていないぞ？

第2話 入学試験？（後書き）

えーというわけで入試の時のものです。

まあ、しばらくは原作をなぞるといっつかパクっていきます。

一応クラス代表が決定した後あたりにオリジナル主人公が登場しますが、そこまでは一夏君主観のもとで原作どおりに進んでいきます。

その後は色々脱線しつつもストーリー的には原作を踏まえて、色々壊しつつ進めていくつもりです。

これからも一夏sideになったりオリ主sideになったり主観人物を変えて以降とは思いますが。

第3話 自己紹介

— 夏side —

・・・そして再び時間はIS学園の入学式後の教室へと戻る。

「新入生の皆さん、入学おめでとつございます。私は、この1年1組の副担任を勤める事になった山田真耶やまたまやつていいいます。よろしくお願ひしますね」

黒板の前で今自己紹介している副担任さんは、一言で言うところ子供が無理して大人の服を着ました』的な感じがする女性だった。身長も女生徒とほぼ変わらないし、なにより雰囲気がぜんぜん大人じゃない。と思うのは失礼だろうか。

「えつと・・・それでは、SHRを始めたいんですけど・・・」
ショートホームルーム

しかしかわいそうな事に、副担任であるはずの山田真耶先生の話は誰も注目していなかった。・・・なぜなら、全ての生徒の視線が俺の方向を向いているからだ！

・・・一番前の列、教卓のまん前という場所に俺を置いた人を少し恨みたい・・・。

「じゃ、じゃあ自己紹介からいきましようか。出席番号1番の人からお願いします」

本来なら高校の入学式というと、気分は上々。適度な緊張と共に期待に胸を膨らませるのが通常の反応といえるだろう。しかし、今

の俺には重度の緊張しかなかった。なぜかって？それは当然・・・

（女子の中に1人男子というのがこれほど辛いとは・・・!!）

自意識過剰などではなく、本当に全員の視線を感じる。もはや俺の耳には他の人の自己紹介などは入ってなくて、どうにか救いを求めようと視線を左右に流していた。

すると、窓際にいる1人の女生徒が目に入った。

「・・・・・・・・」

救いを求めての視線だったのだが、薄情な事にその女生徒・篠ノ之箒しののへはふいつと窓の外を向いてしまった。

6年ぶりに再開したというのにこの幼馴染様ときたら、俺のことを無視するかのようにさつきから視線を合わせてもくれない。

・・・嫌われているんだろうか。

「・・・くん。織斑一夏くん？」

「・・・っ！は、はいっ！」

「はうっ」

急に名前を呼ばれたものだから、思わずおれは大きな声を出してしまった。それによって山田先生は少しなみだ目になってるし、周りの女子からはクスクスと小さな笑い声が聞こえてきて、俺はますます落ち着かない状況へとステップアップしてしまった。

「えっと・・・急に呼んだりして怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね？でも、今自己紹介『あ』から始まって今『お』なんだよね？だからね、できれば自己紹介してほしいなって思うんだけど・・・ど、どうかな？」

気がつくとも山田先生がすっかり怯えて、ぺこぺこと謝っていた。

「いやあの、そんなに謝らないでください。・・・というか自己紹介しますので、先生も落ち着いてください」

「ほ、本当ですか？本当ですね？先生と約束してね？」

何でもここまで怯えられているんだろう・・・と思いながらもとりあえず自己紹介することにした。

「えーと・・・織斑、一夏です。よろしくお願いします。」

無難に挨拶をして、頭をぺこつと下げると、好奇心に目を輝かせている女生徒が目に入る。

・・・ほぼ全員が、『もつと色々喋ってよ』や『これで終わりじゃないよね？』的な目、あるいはオーラを纏ってこっちを見ている。

「えーつと・・・あー・・・その」

担任の山田先生に『これで終わっていいですか？』的な目をむけるものの、先生すらも『まだあるよね？』的な目で見つめてきている。助けを求めて幼馴染の箒に目を向けても、目をそらすばかりで助けてはくれなかった。

（マズイな・・・このままだと暗いやつというレッテルを貼られてしまう）

そう思った俺は、一度息を止め、大きく息を吸い込み思い切って口を開く。

「以上です！」

がたがたっ！とずっこける女生徒が何人かいたが、俺はこの空気が耐え切れそうになかったのである。

「あ、あのー・・・」

山田先生のまた涙目になっていた。え、ダメでした？と聞こうとした所・・・

バアンツ！ 背後からいきなり頭を叩かれた。

「いつ——！」

痛い、という頭からの情報と一緒にあまり思い出たくないことまで頭に浮かんできた。

この叩き方——威力、角度、速度——俺のよく知る人物にとってもよく似ていた。別人だということを期待しつつ、俺が後ろを向くと・・・

「・・・・・・・・」

おそらく武器にしたであろう出席簿を手に持ち、すらりとした長身に黒いスーツを着たまるで肉食獣のような鋭い目をした女性が立っていた。

「げえっ！かn・・・」

バアンツ！

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者め」

・・・言い切る前に叩かないでほしい。しかしなぜこの人がここ

にいるんだろう・・・？

「あ、織斑先生。会議はもう終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を任せていてすまなかったな」

おお、俺が聞いたこともないやさしい声だ。

「い、いえつ。私は副担任ですから、これくらいはしないと・・・」

はにかみながら山田先生が応えると、ついさっき俺に攻撃を加えた女性——そう、俺の姉である織斑千冬^{おりむらちふゆ}は周りの女生徒に対してこう言った。

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君達新人を、一年で使い物になるように育てるのが私たちの仕事だ。私たちの言うことはよく聴き、よく理解しろ。解らない者には解るまで指導してやる。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

なんとという暴力発言。間違いなく俺の姉、織斑千冬だ・・・と思っ
つていと・・・

「「「キャーーーーーッ！！！！」」」

という超音波兵器かとも思える女生徒からの悲鳴（声援か・・・？）が聞こえた。

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまにあこがれてこの学園に来たんです！北九州から！」
「あの千冬様にご指導いただけるなんて光栄です！」

女三人集まると姦しいというが、これはそれ以上だった。千冬姉もうつとうしそうにしてる。

「毎年、よくもこれだけ馬鹿者が入学してくることだ。それとも、私のクラスにだけ馬鹿者が集められているのか？」

「千冬様！もつと罵って！罵倒して！」

「でも時にはやさしくして！」

「そしてつけあがらないように躑をして〜！」

本当に騒がしかった。

俺も担任が千冬姉ということに驚きを覚えていたが、周りが騒がしかったために落ち着いてきた。

しかし、IS学園で教師をしているとは……。3年前にIS操縦者を引退してから、一年ほどドイツの教官をしているまでは知っているのだが、その後何をしているかはなぜか教えてくれなかったからな。

「で？——挨拶もまともにできんのか、お前は」

「いや、でもさ千冬姉」

Bannon!

「学校では織斑先生と呼べ」

「・・・はい、織斑先生」

これで俺の脳細胞が1万5千個死んだ。千冬姉、俺の頭を Bannon たたくのやめてほしい・・・

「え・・・？織斑君って千冬様の弟？」

「じゃあ男でISが動かせるのってそれが原因で・・・？」

「ああっ、いいなあ、代わってほしいなあ」

外野の女子がなかなかにうるさいが、とりあえず言っておくと千冬姉はモンド・グロッソというISの世界大会で第一回開催時に優勝している。第二回は色々あって決勝戦で棄権したんだけど・・・ともかく、第一回モンド・グロッソで優勝したためか、女性からは強い女性の象徴みたいなもので憧れの目で見られるし、男からは当然言い寄られているらしい。まあ、全て無視しているらしいが・・・そんなことを考えていたらチャイムが鳴った。

「さあ、SHRは終わりだ。これより諸君らにはISの基礎知識を半月で覚えてもらう。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

人の皮を被った悪魔・・・いや、悪魔の心を持った人からの言葉だが、誰も逆らおうとしない。

なまじ人間の性能限界を知り尽くしている分悪魔なんかよりもちが悪い。

「それと、このクラスには本来31名いるはずだが、現在1名が本人の事情によって1、2週間ほど遅れて到着する予定だ。席は織斑の横。来た時に自己紹介をさせる」

どうりで俺の左隣の席が空いていると思っただら。にしても、普通入学式に遅れるかね？・・・いやまあ、藍越学園の入試に行かずにIS学園の入試に紛れ込んだ俺が言うことでもないけどさ。

「席に着け、馬鹿者」

と、考えていたらまた怒られた。出席簿アタックが来る前に座るとするか・・・。

第3話 自己紹介（後書き）

えー、相変わらずオリ主は出ません、はい。

クラス代表が決定してからにする予定なので後2、3話は無理だ
と思います。

感想・アドバイスなどがございましたら、書いてくださると嬉し
いです。

追記 えー、ありえないことですが・・・一組の代表を決めるのは、
1週間後に対決というのを忘れていました・・・なので2、3日で
はなく、オリ主が到着するのが1、2週間へと変更になりました・
・なんで忘れていたんだろう・・・

第4話 代表候補生

「——であるからして、現時点ではISの基本的な仕様は国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によつて処罰の対象になる可能性も——」

（これは・・・マズイな・・・）

授業が始まったわけだが・・・まったくわからん。どうやら他の女子はIS学園に入る前に自習をしてきているらしい。俺の場合は急だったこともあつて予備知識が全くない状態でのスタートだったと、うんうん唸っている俺を見かねた山田先生が話しかけてきた。

「織斑君、何か分からないことはありますか？」

「あ、えっと・・・」

「何かわからないことがあつたら何でも訊いてくださいね。なんと言つても、私は先生なんですから！」

そういつてえっへんと胸を張る山田先生はいつもと違ってきちんと先生に見えた。だから俺は思い切つて訊く事にした。

「じゃあ、先生！」

「はい、織斑君！」

「ほとんど全部、わかりません！」

その瞬間に周りからいすからずり落ちる気配を感じたが、気のせいということにしておこう。

「えっ・・・ぜ、全部、ですか？」

俺の爆弾発言を聞いた山田先生は一瞬うつらえたが、すぐに気を取り直して、周りの女生徒に問いかけた。

「えっと・・・今の時点で解らないって言う人はどれくらいいますか？」

「・・・・・・・・」

あれ？俺だけなのか？最初で躓いたまま進むと、絶対後で後悔するぞ！それでいいのか、みんな！

「織斑、入学前の参考書は読んだのか？」

教室の端で授業を見ていた千冬ね・・・織斑先生が訊いてくる。

「あの分厚いやつですか？」

「そうだ、必読と書いてあっただろう」

「あー・・・古いタ○ンページと間違えて捨てまし　バアンツ！　たアーツ！」

まだ言い切ってないのに・・・！

「まったく・・・後で再発行してやるから一週間以内に覚えてこい」

「え・・・あの厚さを一週間じゃ・・・」

「やれと言っている」

「はい」

「ISは機動性・攻撃力・制圧力と従来の兵器をはるかに凌ぐ性能を持っている。そういった兵器を深く知らずに使えば確実に事故がおきる。それが起こらないようにするための基礎知識と訓練だ。たとえ理解できなくても覚える。守れ。規則とはそういうものだ」

正論なんだけどなあ・・・でも俺は、望んでここに来たわけじゃなく、黒服に「君を保護する」とか言われて無理やり入らされたからなあ。

「・・・貴様、『自分は望んでここにいるわけじゃない』とか考えているな？」

「・・・うつ（何でバレたんだろう）」

「望む、望まざるに関わらず人は集団の中で生きなくてはならない。それを放棄するというのならまず人間を辞めるんだな」

相変わらず辛らつなお言葉だけど・・・やるしかないか。いつまでも千冬姉に甘えてるわけにはいかないしな。

そうして再開した授業だったが、相変わらず俺には理解できないものであった。

キンコンカンコン

「それでは、休憩時間に入る。あまり騒ぐなよ」

やっとこさつと授業が終わって休み時間。

「ちょっと、よろしくて？」

「ん？」

急に俺に話しかけてきた相手は、地毛の金髪は鮮やかで、白人特有のブルーの瞳が少しつり上がった状態で俺を見ていた。わずかにロールがかかった髪はいかにも高貴な雰囲気を出していて、その女子の雰囲気も『いかにも』いまの女子、女性といった感じだった。

今の世の中、ISを使えるようになってから女性の立場は急上昇

を続け、今じゃ完全に女「偉い」という構図にまでなっている。逆に男の立場は底辺を通り越し、奴隷か労働力にしか思われなくなっている。町で見かけるとパシリにされるのなんて日常茶飯事だ。

つまりそういう、いかにも現代の女子といった感じの子が俺の前にいた。腰に手を当てているポーズも様になっっているあたり、いいとこのお嬢様なのかもしれない。

ちなみにIS学園では外国人は珍しくない。というより半数以上が外国人であるため、日本人はクラスに半分いればいい方だったりする。

「ちょっと、訊いていきますの？」

「あ、ああ・・・訊いてるけど、何か用か？」

「まあ！なんですの、そのお返事！わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがありませんじやありませんの？」

「・・・・・・・・・・」

正直、この手合いは苦手だった。ISを使える、それは国の防衛力、軍事力に繋がる。ISは女性にしか扱えない、だから女性の方が偉いというのはおかしい気がする。ISが使えるからってそれを理由に見下すって言うのはただの暴力だと思う。

「悪いな、俺君のこと誰か知らないし」

「知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試首席のこのわたくしを知らないのですか？」

「あー、セシリアっていうのか・・・というか質問、いいか？」

「ふん。下々の方の要求に応えるのも貴族の義務ですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って何だ？」

がたがたっ！聞き耳を立てていた周りの女子がずっとける音が聞こえた。

「あ、あ、あ……」

「うん？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

「おう。知らん！」

「……………」

なんか周りから『かわいそうな子』を見る目で見られてるんだが……なんなんだろう？

「信じられない。信じられせんわ。極東の島国というのは、ここまで文明レベルが低いのかしら。常識ですわよ、常識」

「常識って言われてもなあ……知らないものは知らないし」

「はぁ……国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されたエリートのことですわ。単語から想像すればわかるでしょうに」

「そういわれればそうだな」

「そう、エリートなのですわ！本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運ですよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「……あなた、馬鹿にしていますの？」

「いや、馬鹿になんてしてないぞ」

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせてくれるかと思っていましたけれど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだけどなあ……」

「ふん、まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたのような人間

にも優しくして差し上げますわ。ISのことではわからないことがあれば、まあ泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せ私、入試で唯一教官を倒したエリートなのですから!」

この態度でやさしいというのか・・・15年生きてきて始めて知ったぜ。・・・ん?教官を倒した?

「入試って、あれか?ISを動かして戦うやつ」

「それ以外にございますの?」

「あれ、俺も倒したぞ、教官」

「は・・・?」

性格には俺に驚いて壁に突っ込んで動かなくなっただけだが(第2話参照)。

「わ、わたくしだけを聞いておりますが?」

「女子ではっていうオチじゃないか?」

「つ、つまりわたくしだけではないと・・・?あなたも教官を倒したって言うの!?!」

「うん、まあ。たぶん」

「たぶん!?たぶんってどういう意味かしら!?!」

「えーと、落ち着けよ。な?」

「こ、これが落ち着いていられ——」

キンコンカンコン

と、ここでチャイムが鳴った。今の俺には福音に聞こえる。

「っ・・・!話の続きは、また改めて!逃げないことね!よろしくって!?!」

よくない。でもそういつたらまた怒るだろうから、うなずいておく。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する。・・・っと、その前に再来週行われるクラス対抗戦^{リーグマッチ}に出る代表者を決める」

クラス対抗戦^{リーグマッチ}？代表者？

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点ではたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりでいる。自薦他薦は問わない。誰かいないか」

とりあえずクラス長を決めるということでいいらしい。面倒そうだし、他の誰かがやってくれることを期待しよう。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

「って、お、俺？」

「では候補者1人目は織村一夏・・・他にはいないか？」

「待つてくれよ、千冬姉！俺はそんなの——」
「バアンツ！」

「織斑先生と呼べ。自薦他薦は問わないといった。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた異常は覚悟を決めろ」

「い、いやでも——」

「納得がいきませんわ！」

パンツと机を叩いて立ち上がったのは、あのセシリア、・・・なんとかさんだ。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！わたくしに、そのような屈辱を一年間味わえとおっしゃいますの！？大体、文化として後進的な国で暮らさなくてはならないということ事態、わたくしにとっては耐えがたい苦痛で――」

さすがにここまで言われたら俺もちよつと頭にきてしまった。

「イギリスだってたいしたお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なあっ！？あ、あつ、あなたねえっ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「お前が先に侮辱したんだろっが」

「~~~~っ！決闘ですわっ！」

「おう。いいぜ？四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたら私の小間使い――いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない。」

「それを聞いて安心しましたわ」

「それで、ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？まあ、イギリス代表候補生であるわたくしと戦うのですから、それくらいは――」

「いや、俺がどのくらいハンデをつけたらいいのかなーと」

と、そこまで言ったらクラスからドツと爆笑が巻き起こった。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、10年以上前の話だよ？」

「織斑君はIS使えるかもしれないけど、それは言いすぎだよ」

——しまった、そうだった。ISを使えるのが女性である以上、男が圧倒的に弱い。もし男女間で戦争が起こったら男は三日と持たないといわれている。というより三時間で制圧されかねない。

「・・・じゃあ、ハンデはいい」

「ええ、そうでしょうとも。むしろ、わたくしがハンデをつけなくていいのが迷うくらいですわ。ふふっ、日本の男子はジョークセンスがありますのね」

「織斑くん、今から遅くないよ？セシリアに言って、ハンデを付けてもらったら？」

「男が一度言い出したことを覆せるか。ハンデはいらない」

「えー？それは代表候補生をなめすぎだよ。それとも、ISは稼働時間がものを言うんだよー？」

確かに俺はISについてほとんど何も知らない。千冬姉の現役時代の映像を隠れてちょこっと見ただけだったりする。

「よし、話は決まったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

（まあ、一週間あれば基礎くらいはマスターできるだろうし、そんなに難しいものでもないだろ・・・入試の時も一発で動いたしな）

と、俺はなんとかなるだろうと考えて、とりあえず授業に集中した。

第4話 代表候補生（後書き）

はい、セシリア登場です。今見るとセシリアの口調が違うというか・・・なんか違和感だらけでしたねー。アニメを見ながら書いているのですが、アニメとも違うので原作とアニメの言動両方を使ったりしているので変に混じっている気がします。

まあ、次の話は一夏と第の相部屋話なわけですが、ここも原作どおりにしようかなーと思っております。

感想・アドバイスなどをくれると嬉しいです。

第5話 始動

——???side——

暗い通路を歩く。リノリウムの床は高く靴音を響かせる。通路の端には埃が溜まっていて、あまり人が通っていない通路だということ分かる。

（結構汚れてるな・・・今度掃除しないとダメかな、これは・・・）

長く伸びる通路を、時には右に、時には左にと複雑に曲がりながら奥へ奥へと進んでいく。何度も着ているため、迷路のような構造上のこの通路も目隠ししても目的地にたどり着ける・・・かもしれない。

（まあ、あの人達みたいに頭の出来がいいわけじゃないし・・・俺には無理かもな）

そうしてある通路の端にある『T・S』と書かれたプレートがある扉の前に立つ。ここが目的地であり、彼女が毎日籠っている部屋だった。IDカードとパスワードを入力して、俺は部屋の中に入った。

「ただいま戻りました、っと・・・」

「おー、おかえりせつちゃん。結構早かったねー？」

「いや・・・またすごいことになっていますね、この部屋・・・」

部屋の中はすごい状態だった。部屋の至る所に機械の備品がちりばめられ、ケーブルが樹海の根のように広がっている。前回着たと

きよりも機械の備品の数が1割ゝ2割増しになっていた。

「1週間前に見たときより明らかに量が増えているんですけど・・・
どこから出しました、これ？」

「んゝ？まあちよつとねえ。細かいことは気にしちゃダメだよ、せ
つちゃん」

「言いたいことが山ほどありますがとりあえず片付けてください」
「んゝ・・・しょうがないなあ・・・じゃあ、またコレでもばらま
くかな」

そう言っただけで彼女が取り出したのは機械仕掛けのリスだった。彼女
お手製のそのリスは、彼女にとつて要るパーツと要らないパーツを
自動分別して、要らないパーツをドングリのようにかじって構成物
質を分解・吸収し、別の形状・物質へと再構成する機能を持つてい
る。

「毎回思うんですけどこれってどうやって識別してるんですか？」

「私のコンピューターの中に作つてある人工知能（AI）とこの子
達が繋がっているんだよ。今私が欲しい物、要らない物をAIが判
断して、この子達に送受信しているわけだね」

「AIが間違えて他の部品を壊すことつてないんですか？」

「それはないさー。なんていっても私は篠ノ之^{しののたはね}束さんだからね」

そういつて（大きな目の）胸を張っているこの人こそが世界最強で
あり世界最高の力をもつマルチフォーム・スーツ【IS】を作り上
げた篠ノ之束その人だった。いつも空のように真っ青のワンピース
と真っ白なエプロン、腰の大きなリボンに頭の上のウサ耳を1セツ
トで着ている。さながら『1人不思議の国のアリス』状態だったが
知ってる人からするとこの姿じゃない方がかえって不気味だった。

「まあ、間違つて俺のことを食べなければいいです」

「おお・・・その手もあったか」

「いや、俺は鉱物や機械じゃなくて生物だから再構成はできません」

「むう・・・今度改良してみようかな・・・」

「やめてください」

この人がやつたら牛を吸収してミノタウロスを作り出しかねないからな・・・。

「ところで俺の預けていたの、終わってますか？」

「あー、うん。当然終わってるよ。なんと言つても私は完璧において十全な篠ノ之束さんだからね。その私がやるんだから・・・」

「それは完璧にして十全、でしょ？耳にタコです」

「分かっているのならいいさ。君が預けていたのはずっと、これだね、はい」

「ありがとうございます」

そういつて俺が手に取ったのは黒いチェーンに繋がれた真つ黒な『三日月』型のペンダントだった。

「それじゃ、また俺は行つて来ます。あ、それと・・・」

「ん？なにー？」

「俺のIS学園への入学手続きは終わってますよね？」

「うんー。全部ちーちゃんがやってくれたよ」

「じゃ、安心ですね。貴女に頼まれた今回の仕事が終わったらそのままIS学園に行きますから、今度は長く帰ってこないと思います」

「OKOK」。せっちゃんもがんばってね」

「はい」

そう返事をして部屋を出ようとした俺に、束さんは少し口調を変

えて話しかけてきた。

「ん・・・その前に、ちょっといいかな？」

「はい？」

「せっちゃんのこととはけっこう前・・・2年暗い前かな？それから知ってるし、信頼もしてるけどね。でも私はそれ以上に篝ちゃんやいつくん、ちーちゃんが大切だから。皆に会う前に・・・会わせる前に最後にもう一度確認しておこうと思ってね」

「・・・はい」

そう、俺は束さんから俺専用のISをもらう前に聞かれた事があった。元々束さんは俺に対してはほとんど興味を持っていなかった。それでも千冬さんが俺のことを気にかけていたり、俺自身のとある事情によつて少しずつ興味を持ってくれて1年前にやっと俺の説得を聞いてくれてISを作ってくれた。

「あの時も聞いたことだけだね・・・、如月刹那くん。キミは何のためにISを使うの？何のために本当は嫌っているはずのISに乗っているの？」

「・・・はい」

「キミにとってはISというのは憎むべき対象のはず。そしてISを作った私は殺したいほど憎いはずだ。そして私のことを知った今なら、私が一番苦しむのは篝ちゃんを苦しめることだって分かっているよね？」

「・・・はい」

「じゃ、聞こうかな。キミは私が憎くないのかい？そして、私に復讐したくはないかい？・・・私に復讐をするために篝ちゃんをどうこうしたいかと思ったことはあるかい？・・・この返事しだいでは私はキミの首にかかっているソレを爆破させるかもしれない」

あの時も聞かれた問い。そして、今となつてはより深い問題。俺は束さんの一番の弱点ともいえる妹の篠ノ之箒のそばにいることになる。もし俺が束さんに復讐を考えるならそれは彼女にとって一番大切な人がいるところに危険を放り込む事になる。あの時の俺はほとんど何も考えずに答えただけ、今改めてよく考えても答えは同じだった。

「・・・正直に言つと、ですね」

「うん」

「俺は、貴女のことを憎くない・・・と言つたらうそになりますね、やつぱり。どんな経緯があつて、どんなことを思つてISを作ったのか俺にはいまだにわかりません」

「そうだろうね。私にもよく分かつてないし」

「でも・・・、やつぱりあの時と答えは一緒ですよ。俺は復讐のためには動かないつて決めました。・・・これを破つてしまつたら、俺を・・・俺の全てを救つてくれた彼女に顔を向けられませんか」

「今でもそれは変わらない？・・・その時の思いは・・・いや、想いは今でも変わらないと誓えるかい？」

「あの時の想いは変わつてないとは誓えません。でも俺の中に彼女が残っている限り人を傷つけるための力はいりません。あの時、そう約束したので」

「ん・・・ここでもし誓えるとかつていつたら迷わず爆破していただけどね。・・・人の想いは変わっていくから。どんなに愛しても、どんなに憎んでも。・・・季節の移ろい、時間の流れと共に嬉しさや愛しさ、悲しみや苦しさは流れていく。当然、その時想つた心もね」

「それでも・・・、欠片でも覚えているのなら俺はあの約束を守れると信じています」

「ん・・・それを分かっているのならいいさ。箒ちゃんに会つても

何もしないとキミを信じられる」

そう、俺は彼女によって救われた。俺が5年前にISを動かしてしまっただ後に受けたあの約2年に及ぶ検査という名の拷問によって心を砕かれていた俺を。その彼女を俺が覚えていた限り俺は復讐のために、憎しみのために力を行使することはないと思う。

「じゃあ・・・。行つて来ます、束さん。」

「うん。行つてらっしゃい、せつちゃん」

そうして俺はこの部屋を出た。IS学園に行く前に束さんに頼まれた仕事を片付けるために。この手に胸の三日月形のペンダントを握り締めながら。

—— 束 side ——

「行つちゃったか・・・。」

せつちゃんが部屋を出て行つた後、私は少しそちらを見ていた。ちーちゃんとはまた違ったタイプの真面目系の人間だから、私としてはもつと気を抜いてもいいと思うんだけどな。

「前に聞いたとき・・・かあ」

気づけばせつちゃん初めて会つて、彼に頼まれてISを作つてからもう2年が経っていた。（実際は千冬が3年前に出会つた後、一度束に合わせに来ていているのだが束は忘れている）

「想いは変わってないとは誓えないって言つてたけど・・・あの子の心はあのときから全く変わってないみたいだねー」

あの時会った時も、その後色々頼みごとをするようになっても・・・そして、今になってもまだ彼の心は変わっていないように見える。ずっと1つのことを守っている。そう、

「彼女がいて、彼女が愛した世界、だから護りたい、かあ・・・。よくあそこまで心を変えずに・・・想いを忘れずにいたものだ」

人は変わっていく。良くも悪くも。それが人が生きるうえでの進化なのだからしょうがないことだ。でも時には私のようにほとんど変わらない人もいたけど、それは私みたいに心が最初から壊れている人間だからだ。彼は違う。彼は心を保っている。その上での時のまま・・・変わらずにいようとしている。

「それはとっても良くないことなんだよ、せつちゃん・・・」

心が変わらない。進化しない。それは生物としては欠陥品に等しい。私のように最初から壊れていて、壊れているのが分かっているけどそれを選んだ人間とは彼は違う。

「ちーちゃんに、篝ちゃんに・・・それからいつくんに。皆に会うことであの子の心も変わっていけばいいんだけどね」

変わっていくことは罪じゃない。大事なものは、何を基盤にしてい
て、それをどう守っていくかだ。私は篝ちゃんが一番大切。ちーちゃんやいつくんも大切だ。せつちゃんも大事になってきてしまった。

「守るものが多いって言うのはね、せつちゃん・・・。一番大切なものを守れないって事なんだよ？」

だから私は『他』を最初から捨てた。私にとって無価値な人間を。私が興味を抱かない対象を。両親さえも。・・・最初から捨てていた。

「ちーちゃんが一番大切なつくんの為に、あの子を捨てた。人間誰しも何かを捨て、何かを守ろうとしている。でも捨てられない人間っていつかはいつか必ず自分が壊れる」

誰かを守ること、誰かに必要とされることはとても大切なことだ。それだけで生きる希望になる人もいるだろう。でも、それと一緒に誰かを捨てることも大切なことだ。1人で何でも抱えていたら最後には必ず抱えきれずに壊れてしまう。

「せつちゃんにそれを教えてくれる人・・・それが誰かは分からない。私やちーちゃんじゃダメだったしね」

だからちーちゃんに聞いたところ、『普通の15歳らしく、学校に通わせてはどうか』と言われた。確かに誰かわからないせつちゃんに教えてくれるかもしれないその人を探すためには、大勢の人間のところに行くのがいいと思えた。だから私は彼をちーちゃんに預ける事にしたのだ。

「この1年・・・せつちゃんは本当によく働いてくれたよねえ・・・。・・・最初、ちーちゃんにせつちゃんをちょうだいって言ったときはすつごく驚いた顔をしていたよねえ」

1年ほど前にISを操縦できる優秀な助手を探していた私は、前にISを作った男の子を思い出した。その子はちーちゃんの保護下にいるということを思い出し、ちーちゃんにちょうだい&って言ったらすつごく驚いた顔をした。・・・その後助手の

事を言い出したらちーちゃんが鬼のような顔で何度も何度も頭を叩いたのを覚えている。

「ちーちゃん。せつちゃんをよろしくね。・・・私は多分、もうほとんど会えないと思うから」

あの子がIS学園に通って普通の人間になればそれでもよし。それとも私のように壊れた人間になるのならそれかもしれない。どちらにせよ私はやることがある。

「さうと・・・アレを完成させなくちゃねつと」

そう、アレはもう既にほぼ完成していた。せつちゃんのことをちーちゃんに任せた私は、意識はもう完全にアレの最終調整へと向かっていった。

第5話 始動（後書き）

えー前回から結構たってしまいました。申し訳ございません。

基本的に休みが不定期で、仕事がある日はあまり時間がとれませんが……。なので休みがある日だと一応書くことは出来るのですが……。これからも基本的に不定期更新になりますが、1週間以上開くようなことがあればその時の最新話に生存報告等を入れますので、ご容赦の程、よろしく願います。

オリ主の刹那君が出てきましたが、オリISはまだでてきません。次は一夏サイドに戻りますが、そろそろ原作から外れていこうかな、と思います。

一応原作の主だったイベントなどはとるつもりではありますが……。。

感想・アドバイスなどがある方は入れてくれると嬉しいです。

第6話 ルームメイト

— 夏side —

「ふう・・・結局授業にはついていけなかったな・・・」

あれから一応授業を聞いてみたものの、やはり基礎知識なしでは全く理解できなかった。千冬姉が再発行してくれた右手に持つてる参考書が重い。

「しかし・・・これ何ページあるんだろう・・・これ全部暗記するとか、皆すげえなあ・・・」

まあ来週にはセシリアとの対決もあるし・・・覚えなきゃいけないだけだな。にしても決闘か・・・。基礎知識についてはがんばって覚えるとして・・・、ISの操縦方法とか誰か教えてくれないかなあ・・・。

「こういう時こそ幼馴染って助けてくれるものじゃないんだろうか・・・いや、贅沢言ってもしょうがないか」

そうこう考えているうちに、自分の部屋に到着。部屋番号は1025号室。確認して部屋に入ろうと鍵を入れたが、どうやら開いているらしい。

「失礼しまーすっ・・・」

ガチャ。

部屋に入ると、大きな目のベッドが2つ、机が2つ。それと手前には備え付けのシャワールームがある。

この寮には大浴場があるが、俺は使えないことになっているらしい。まあ、男が俺だけである以上、俺のために他の女子全員が窮屈な思いをするわけにもいかなかったらしい。

「誰かいるのか？」

手前のシャワールームから声が聞こえてきた。ドア越しだからか、声に曇りがある。

「……ん？」

「ああ、同室になった者か。これから一年よろしく頼むぞ」

「……なんだろう、すごく、いやな予感がする。」

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ之」

「——」
「……」

シャワー室から出てきたのは、今日再開したばかりの幼馴染だった。

シャワールームから出てきたので、当然風呂上り。そして相手が女子だと思ったのか、篠はバスタオル一枚巻いただけの姿で出てきている。ポニーテールじゃない髪型は新鮮味があるが、それ以上に俺はその体に目がいつてしまっていた。

「……」

「……」

「……い、い、いちか……？」

「お、おう・・・」

部屋にいるのが俺であると気づいた箒は徐々に顔を赤くしていき、やがて首まで真っ赤に染まった。

「み、見るなっ!」

「わ、悪い!」

慌てて回れ右をして箒から目を逸らす。最後に見た箒の姿は体を隠すためにきつく自分で抱きしめていた姿で、それはひどく魅力的で、俺の心臓は壊れるくらいに動きまくっていた。

「な、な、なぜ、お前が、ここにいる?」

「いや、俺もこの部屋だって言われて来たんだけど・・・」

それを聞いた箒の動きは素早かった。全国剣道大会優勝者らしく、凄まじいスピードで壁に立てかけてあった木刀を手に取り、それを上段打突の構えで——って!

「ちよっ、おまつ、それはヤバイ!」

「問答無用だ!」

箒の目が普通ではなかったため、命の危機を判断した俺は緊急退避を実行した。箒に追いつかれるよりも早くドアから廊下に出て、ドアを閉めた。

ボタン!

「ふう・・・なんとか助かつ・・・」
ズドン!

「ひいっ!?!」

ドアを閉めて一息吐いて、少しドアから体を離して頭を下げた瞬間に俺の頭が元々あったところから木刀が生えて来た。

「こ、このドア木製だぞ・・・？木刀で貫通って・・・ひいつ！」
ズドン！ズドン！ズドン！

まるで俺の避け方が手に取るように分かるように、避けた先の俺の急所を的確についてくる。

「本気で殺す気かよ！今のかわせなかったら死んでるぞ！」

と、俺らが騒ぎすぎたせいか隣の部屋や廊下の奥のほうから女子が集まってきていた。

「あれー、織斑くん？」

「ここって織斑君の部屋なんだー」

「いい情報ゲット」

女子が続々と現れ続ける中、俺はこれが非常に危険な状況だと理解した。・・・女子の姿がとにかく刺激的なのだ。男の視線を気にしていないからか、非常にラフな姿で廊下に出てきている。・・・し、下着をつけていないどころか、長めのパーカーを着ているだけで下にはスカートもズボンもはいていない女子までいた。

「ほ、箒？箒さん？お願いします、入れてください。まずいことになるから！謝りますから！ごめん！すまん！この通り！」

これ以上廊下にいると俺の理性が持つかがレッドゾーンに入りそうだったので箒に部屋に入れてくださいと頼み込む。

「・・・・・・・・」
ズズズズ・・・

それを聞いた箒が木刀の先を部屋の中に入れていった。
しーん・・・・・・・・。

それからしばらく続いた沈黙。時間になると2、3分だろうが回りの女子から視線の集中砲火を浴びている今の状況だと1時間以上に感じられた。

ガチャ

「・・・・・・・・入れ」

「お、おう・・・」

ようやくドアを開けてくれた箒は剣道着を着ていた。おそらく咄嗟に着られるのがそれしかなかったのだろう。なんにしてもようやく入室許可を得たため、俺は俺の部屋に入った。・・・あれ、コレオカシクナイ？

「何だ？早く入れ」

「ハイ」

ハイ、ナニモオカシクナイデス。

「まったく・・・」

「あ、奥のベッド・・・俺が狙っていたのに」

「何か問題でもあるか？」

「ないです・・・」

むすつとした顔で箒はまだ少し濡れたままの髪をポニーテールに

結っていた。ポニーテールにしたことでようやく見慣れた筈に再会できた気分だ。

「お前が・・・私の同居人だということのか？」

「あ、ああ・・・そうだと思うんだけど」

「ど、どういっつもりだ！」

「いや、どういっつもりって・・・」

「男女七歳にして同衾せず！常識だぞ！」

「いつの時代の常識なんだ・・・」

相変わらず古い考えというか、ある意味武士道というかブシドーというか。前に会った時からあまり変わっていないようなので少し安心している自分がいる。

「お、お前が・・・」

「うん？」

「お前が・・・希望したのか？その・・・私と同室がいいと」

「そんな馬鹿な」

「っ！！」

ヒュオッ！

バシーンッ！

「あ、危ねえ！」

俺の答えが不服だったのか、さっき以上の速度で木刀を振り下ろしてきた。偶然掌ではさむように真剣白刃取りのようにキャッチできたものの・・・手が非常に痛い。真剣を取れる人ってどういう人なんだろう。

「馬鹿・・・？そうか、馬鹿か・・・。そうかそうか・・・」

顔が怖い。悪鬼羅刹のような顔というか……。しかもそのまま体重をかけて押し切ってしまうおうと思っっているのか、徐々に押されてきている。このままだと俺の頭がスイカ割りのスイカのように……。いや、スプラッタですまないな、これ。

「わあ……。篠ノ之さん、だいたーん」

「抜け駆けしちゃダメだよー」

「織斑君が総受け……。か。それもいいかもね……。」

傍から見ると簞が俺を押し倒しているように見えるからか、ドアを開けて勝手に入ってきている女子が好き勝手にわめいている。……。最後のは聞かなかった事にしよう。

「な、ななっ……。!？」

「た、助かった……。」

突然出現したほかの女子に驚いたのか、やっと俺の上からどいてくれた。ある意味命の恩人でもある女生徒達がそれを見てまた騒ぎ出す。

「あれー？終わっちゃった？」

「いい感じだったのにねー」

「ここで逆転……。？いや、やっぱり織斑君は総受けキャラとして・。・」

最近の女子高生は殺人未遂を『いい感じ』というらしい。覚えておこう。そして最後のを言っているのは一体誰なんだろう……。いや、これは覚えておかない方がよさそうだ……。

「で、で、出て行けっ！」

そう叫ぶと箒は部屋の中にいた女子5名ほどを廊下に追い出し、（さすがに木刀を使った脅しなどではなく、背中を普通に押していた。）今度はドアに鍵をかけた。・・・どうでもいいけどドアの穴、どうすればいいんだろう・・・。

「一夏・・・」

「お、おう・・・」

「とりあえず、だな・・・。この部屋の決まりというか・・・決める事を決めないといけないと思う」

「あ、ああ・・・そりやそうだな」

「で、では・・・まずはシャワー室の使用時間だが、私は7時から8時。一夏は8時から9時だ」

「え、俺早いほうがいいんだけど・・・」

「お、お前は私に部活後そのままでいるというのか!？」

「部室棟にシャワー室があったような・・・」

「私は自分の部屋じゃないと落ち着かないのだ!」

まあ、それはそうか。俺だって学校なんかのトイレよりも家のトイレの方が・・・。うん？トイレ？

「なあ、箒。この部屋ってトイレついてないよな？」

「ん？ああ・・・。廊下の端に1つずつだったと思うが」

「男子トイレなんて・・・ないよな？」

「・・・」

「え、あれ？俺ってどうすればいいんだ？」

「私を知るか！先生方にでも聞けばいいだろう!」

それはそうなんだが・・・。どうしても我慢できない時があると思う。最悪そのときは・・・

「最悪の場合は女子トイレを使うしかないのか・・・？」

と、言った瞬間に殺気というか殺意を感じ取った俺は正面を向き、そこにいたはずの幼馴染は悪鬼羅刹『OSANANAZIMI』へと変貌をしていたのを目にする。

「お、お前は・・・！しばらく見ないうちに変体趣味に走るとは・・・！見損なったぞ、一夏！」

「な、何でそうなるんだよ！俺だってできれば使いたくなんてないけど・・・！」

「問答無用だ！成敗してくれる！」

「されてたまるか！」

何か使える武器はないかと室内を見渡すと、おそらく箒の私物であろう竹刀を発見した。ボストンバックに突き刺さっているそれを俺は迷わず手に取った。・・・以前は竹刀入れを使えだの何だのうるさかった気がするけど些細なことは今は気にしないでおこう。

（ん？何か引つかかるな・・・このっ・・・）

ずぼぼぼっ！

「ああああっ！？」

ようやく引っこ抜けた竹刀を構える俺に対して、箒は金魚のように口をパクパクさせていた。何かと思って竹刀を見ると、そこには見慣れない形のものがぶらさがっていた。三角形を2つ繋げた様な

「かつ、かつ、返せっ！」

木刀を投げ捨て、竹刀に絡まっていたそれを神速の動きで奪い取った。

「・・・・・・・・」

顔を真っ赤にしてこちらを睨んでくる。一体何が――あ。

「――箒」

「な、何だ・・・」

「ブラジャー、つけるようになったんだな」
「スパーンッ！」

今度こそ俺はその動きを見切れずに、木刀で頭をしたたかに叩かれ、俺は意識を失った。

第6話 ルームメイト（後書き）

ー夏君変態化の話です。

なるべくペースを上げて更新していきたいとは思っていますので
長い眼で見えてくれれば嬉しいです。

感想・アドバイス等があれば書いてくださると嬉しいです。

第7話 専用機

—— 一夏side ——

「なあ、箒……」

「何だ、一夏」

「気のせいかもしれないんだが」

「そうか、なら気のせいだろう」

「たしかISのことを教えてくれてあの時いったよな？」

「……（フィツ）」

「目をそらすな」

「……」

全く……なんでこんな事に……。

—— 1週間前 ——

箒と同じ部屋で過ごすことになった次の日の朝。一緒に部屋ということもあり、朝飯と一緒に食べるに食堂に行った時のこと。

「なあ、箒。ISの事、教えてくれないか？このままじゃ来週のセシリアとの勝負で何も出来ずに負けそうだ」

「くだらない挑発に乗るからだ、馬鹿め」

いや、そうなんだけどさー……とは思いつつも、今の俺には箒しか頼れる人がいないのも事実。

「そこを何とか。頼むよ、箒」

「・・・・・・」

「なあ、箒——」

「ねえねえ、キミって噂の男子だよな？」

「へ？」

なおも箒に頼もうとした俺に、おそらく3年生と思われる女子が話しかけてきた。リボンの色が赤色なので多分間違いないと思う。

（1年は青、2年は黄色。）

「はあ、多分」

「そつかそつか。代表候補生の子と勝負する事になってるっていう噂も本当なの？」

「はい、そうですけど」

「でもキミ、素人だよな？ISの稼働時間ってどのくらい？」

「試験の時だけだから・・・多分20分かそのくらいかと」

「それじゃあ無理だよ。ISっていうのはね、稼働時間がモノをいうの。その相手、代表候補生なんでしょ？軽く300時間はやってるはずだよ」

うげ・・・そんなに差があるのか。このままいったら本当にボロ負けしそうだな。

「でさ、私が教えてあげようか？ISについて？」

おお・・・箒がうなずいてくれないからどうしようかと思っていたら、向こうの方から教えてくれるとは。捨てる神あれば拾う神あるとはこのことか。

「はい、おね——」

「結構です。彼には私から教える事になってますから」

お願いしようと思ったら、箒が横から口を出してきた。あれ？教えてくれるって言ってたっけ？

「でもあなたも一年生でしょ？私のほうが上手く教えられると思うけどな」

「……私は、篠ノ之東の妹ですから」

「え？……篠ノ之つて……ええッ!？」

相手がISを作った人の妹だと知って先輩（名前は知らない）はひどく驚いていた。

「ですので、結構です」

「そ、そう……それなら仕方ないわね」

そういつて先輩さんは去っていった。ああ……親切な人だったのに。

「……何だ」

「いや……教えてくれるのか？ISのこと」

「そうだと言っている」

「そうか。ありがとな、箒」

「……ふん」

ともあれ、これでISの事を教えてくれる人間を確保できた。後はがんばるだけだ、と思っていたら――

「放課後、剣道場に来い。腕がなまってないか見てやる」

「え？いや、俺はISのことを――」

「見てやる」

「・・・分かった」

俺に拒否権はなかった。

—— その日の放課後 ——

「どういうことだっ！」

「どうということって言われてもな・・・」

時間は放課後、場所は剣道場。どこから聞きつけたのか、ギャラリィが大量に集まっていた。非常にやりにくいことこの上ない。

「どうしてそこまで弱くなっている！お前は中学時代何をしていた！」

「受験勉強もあつたし・・・俺、中学校だと帰宅部だったんだよ」

「・・・鍛えなおす」

「はい？」

「鍛えなおす！IS以前の問題だ！これから毎日、放課後3時間！私が稽古をつけてやる！」

「え。それはちょっと長いような・・・。というか今はISのことを——」

「だから、それ以前の問題だといっている！全く、情けない。ISを使うならまだしも、剣道で男が女に負けるなど。悔しくはないのか、一夏！」

「そりゃ、格好悪いとは思うけど」

「格好？格好など気にしてられる立場か！それとも何か、やはりこうして女子に囲まれている生活が楽しいのか？」

カッチーン。自らが望んでいない状況だというのに、そんなことを言われて俺も頭に血が上った。

「楽しいわけあるか！珍獣扱いじゃねーか！その上、女子と同居までさせられて、誰が望んでなんか——」

「わ、私と暮らすのがそんなに不服だというのかっ！？」
「バシーンッ！」

なぜか急に怒り出した箒は竹刀を振りかぶり、防具をはずしていた俺の頭にソレを振り下ろした。避け切れなかった俺がそれをまともに受け、悶えている間に怒った箒は更衣室に行ってしまった。

「織斑くんってさあ・・・結構弱い？」

「どうだろ。篠ノ之さんが強いっていうのもあると思うけど」
「IS本当に動かせるのかなー？」

俺の情けない姿を見たギャラリーの皆さんは、がやがやと騒ぎながら散っていった。・・・くそう、やはり男が女に負けるなんて情けない。こんな有様じゃ、勝負に勝つなんて——何かを守るなんて無理だと思う。

「久々に、トレーニング再開するかあ・・・」

そう思い、奮い立った俺は早速、竹刀を振るい始めた。

——そして現在、対決直前——

「そう、確かに俺は箒に剣道を習うことは了承したけど・・・ISはどうしたんだよ」

「・・・仕方ないだろう、訓練機はまだ貸し出し不可で、お前の専用機はまだ届いていないのだから」

「知識面とか色々あるだろ？」

「……………（フィッ）」
「だから目をそらすなァーッ」

箒との剣道修行については逆に助かってるくらいだからそれはい。しかし問題は、この勝負の為にISを教えてもらえなかったということだ。理由の1つは先生役の箒が剣道に熱中してしまったのと、もう1つは——俺のIS、俺の専用機がまだ届いていないということだった。

—— 剣道場で負けた次の日のSHR前 ——
ショートホームルーム

「篠ノ之さん、篠ノ之さん」

「……なんだ」

「篠ノ之さんがあの篠ノ之東博士の妹だっていう噂が流れてるんだけど、本当なの？」

「……………」

そう、前日にあの先輩（名前は知らない）に東さんの妹だといった次の日にはもう箒が妹だという噂が流れていた。……女子の噂好きってすごいなあ。広まるスピードが尋常じゃない。それが真実か、教室中の女子が聞き耳を立てているところか、廊下にまで他の女子がいる。

「ねえねえ、篠ノ之さ——」

「いい加減席に着け、馬鹿者」
「バアンッ！」

「うぐうっ！」

いつまでもしつこく箒に聞いていた女子が、いつの間にか教室に入ってきていた千冬姉—— 織斑先生に出席簿で叩かれていた。・

・今千冬姉と頭の中で考えたたん、あの人の目が光り輝いて、こっちを見た気がする。

「もうSHRが始まるぞ。廊下の馬鹿どもも教室にもどれ」

「「は、はい！」」

蜘蛛の子を散らすように、廊下の女子は教室へと戻っていった。俺にもあれくらいの迫力があつたら楽に追い返せるんだろうか。・

・無理だと思う。

「先生、篠ノ之さんが篠ノ之東博士の妹だって言うのは、本当なんですか？」

1人の勇気ある女子が千冬姉に箒と束さんの関係と聞いていた。

「そうだ、篠ノ之はアイツの妹だ」

・・・個人情報を勝手にばらしていいんだろうか。まあ隠すようなことでもないし、昨日自分で言ってたからいずればれることではあるか。

「ええええーっ！す、すごい！このクラス有名人の身内が二人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？やぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？今度ISの操縦教えてよっ」

箒が束さんの妹と知ってからか、さつきまでおとなしくしていた女子までも箒に質問しはじめた。千冬姉も不機嫌な顔をより不機嫌にさせて、女子達に出席簿を振り下ろすべく、行動を開始しようとしたそのとき――

「あの人は関係ない！」

「「「・・・・・・・・」」」

急に箒が大声を出した。

「・・・・・・・・大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられることは何もない」

そういつて箒は窓の外に顔を向けた。他の女子はというと、突然の箒の大声にびっくりしていて、動けずにいた。

（箒って束さんと仲悪かったつけ・・・・？）

俺の知らない7年間に何かあったんだろうか。

「全く・・・・いいから席に着け。SHRを始めるぞ」

「「「は、はい！」」」

ようやくフリーズから解かれた女子達は急いで席に着いた。多分もう少し遅かったら出席簿に殴られていただろう。

「それから織斑。お前のISだが、少し時間が掛かる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園側で、専用機を用意する」
「専用機??？」

「ええゝっ！？専用機！？一年生の、この時期に!？」

「つまりそれって政府から支援が出るって事だよな!？」

「いいなあゝ。私も専用機がほしいゝ」

俺が専用機とはなんぞや？と思っていると周りの女子は再び騒がしくなった。

「・・・織斑、ISの基本事項6ページ。音読しろ」

「え、えーと・・・」現在、幅広く様々な国家、大手企業などで開発・技術提供が行われているISですが、その中心である【コア】の製造技術は一切開示されておりません。現在世界中にあるIS467機。その全てのコアは篠ノ之東博士が製作したもので、これは完全なブラックボックスであり、未だに博士以外にコアの製造は不可能という状況にあります。各国家・企業・組織・機関ではそれぞれ割り振られたコアを研究・開発・訓練として使用しています。またコアの取引はアラスカ条約第7項に抵触し、あらゆる状況下で禁止されています」

「つまりそういうことだ。本来ならIS専用機というのはいずれかの国家、あるいは企業などに所属していないと持つていることは出来ない。だが、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的とした専用機を学園側で用意するということだ。理解できたか？」

「い、一応・・・」

つまりISというのは1・中心となるコアは467個しかない。
2・国家や企業に割り振られている以上、そこに所属していないと持つていけない。3・俺の場合は学園で用意する実験機的なものらしい。ということか。

「お前のISが届き次第フォーマット初期化と最適化フィッティングを行う。いつ届いてもいいように体調管理はしっかりしている」

「あ、ああ。それは大丈夫だ。千冬姉」

「バアンツ！」

「学習しろ、馬鹿者。織斑先生だ」

「・・・はい。」

「周りの馬鹿どももとつと座れ。叩かれないか？」

それを聞いた女子達は一斉に席に着き、静かになった。

——そしてまたまた現在。ISがない状態での対決直前——

「この場合、俺はどうすればいいんだろう。不戦敗か？」

「私を知るわけがないだろう・・・」

それはそうなんだが、と言おうとしたら俺たちが今いる第3アリーナ・Aピットに山田先生が非常に慌てた様子で入ってきた。

「お、織斑くん、織斑くん、織斑くん！」

「山田先生、落ち着いてください。ほら、深呼吸深呼吸」

「え・・・？あ、はい。す～～～は～～～、す～～～は～～～」

「はい、そこで息を止めて！」

「うっ」

うわあ、本当に止めちゃった・・・だんだんと苦しくなってきたのか、顔が酸欠で赤くなってきた・・・どうしよう、これ——

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ぶはあっ！ま、まだですかあ？」

バアンツ！

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

「・・・はい」

止めるタイミングを逸しただけです、と言ったらまた殴られると思ったので言わなかった。

「そ、それですね、織斑くん。来ました!」

「なにがですか?」

「織斑くんの専用ISです!」

「え?」

「織斑、すぐに準備しろ。アリーナの使用時間が迫っている。ぶっつけ本番でものにしろ」

「え?」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せろ、一夏」

「え? あ、あの・・・」

「「早く!」」

「はい!」

俺の周りには、こういった女性しかいないんだろうか・・・と考えてしまう俺だった。

山田先生が壁際のキーボードを操作して、ピットの搬入口を開けた。俺はその奥を見て、そして――

――そこに、『白』が、いた――

第7話 専用機（後書き）

『白』の専用機の話です。次でようやく戦闘シーンに入ります。まあ、ここは原作とほぼ同じにする予定ですが。

とりあえず上げておこつた状態を出しているので、誤字・脱字の確認があまりとれていません。見つけ出しましたらご一報くださると嬉しいです。

第8話 クラス代表決定戦（前編）（前書き）

なんか白式の説明が長くなってきたので・・・戦闘シーンはまるごと後編に移しました。明日中にはアップできるかと思っています

第8話 クラス代表決定戦（前編）

— 夏side —

第3アリーナのAピットの搬入口が開き、その奥にあるISが姿を現した。

それは一言で言うならば『白』だった。

「これが・・・」

「はい！織斑くんの専用IS【白式】です！」

真っ白い体を持つそれは、俺を待っているように思えた。そう、こうなることをずっと前から待っていた。この時を、ただこの時を。

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないから、フォーマット初期化と最適化は実戦で行え。できなければ負けるだけだ。いいな？」

「ああ、分かってる」

試験の時のように、ISのことが何でも分かるような電撃のような感覚はなかった。ただ、馴染む。理解できる。これが、何なのか。何のためにあるのか。——分かる。

「背中を預けるように——オートああ、そうだ。座る感じでいい。後は白式のシステムが自動操作で最適化する」

千冬姉の言葉どおり、装甲を開いているIS——白式に背中を預けるように座る。受け止めるような感覚がしてから、すぐに俺の体にあわせて装甲が閉じた。

かしゅっ、かしゅっ、という空気を抜くような音が響く。そして、生まれたときからわが身のようなあの一体感。融和するように、適合するように、まるで俺のためだけの為に作られたかのように白式に『繋がる』。

解像度を一気に上げたかのようなクリアな感覚が司会を中心に広がって、全身に行き渡る。各種センサーが告げてくる値は、どれも普段から見慣れているかのように理解できる。

『——戦闘待機状態のISを感知。操縦者：セシリア・オルコット。登録ISネーム【ブルー・ティアーズ】。戦闘タイプ：中距離射撃型。特殊装備有り——』

白式から、対戦者であるセシリアの情報が流れてくる。そうか、セシリアはもう準備OKってことか。

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

いつもと同じ態度に見える千冬姉の、その微妙な声の振るえまで知覚できる。——ああ、心配してくれてるんだな。

「大丈夫だ、千冬姉。行ける」
「そうか」

ほっとしたような声。でも感情をあまり見せない声だから、ISのハイパーセンサーがなければ分からないほどに小さなブレだった。

（まあでも・・・俺のこと名前で呼んだし、千冬姉っていつでも怒らないし。やっぱり分かったかな？）

それとなく、箒の方に意識を向ける。目で見る必要はない。何せ、自分の周り360度が『見えているの』だから。

「・・・・・・・・」

何か言いたそうな、それでいて言葉が見つからないような表情。これもおそらく、通常ならわからない程度のブレだろう。

「箒」

「な、なんだ？」

「行つて来る」

「あ、ああ……。勝つてこい」

「ああ！」

そして会話を終えた俺はピット・ゲートに向かった。かすかに体を傾げるだけで、白式はふわりと浮かび上がって前に進んだ。

クリアーな意識の、その裏側では白式が膨大な情報量フイッティングを処理していた。俺の体にあわせて最適化を行い、その前段階の初期化フォーマットを行っているからだ。

今こうしている間にも、白式は表面装甲を俺に合わせて変化・整形させている。ソフトウェアハードウェア中身と外見の両方を一斉に書き換えているのだから表示されている数値は見たこともない桁を示していた。

何はともあれ、今は裏方に意識を向けている場合ではない。ゲート開放まで後2 / 05718422秒——『敵』がそこにいるのだから。

第9話 クラス代表決定戦（後編）

「あら、逃げずに来ましたのね。それは褒めて差し上げますわ」
「そりゃどーも」

セシリアがふふんと鼻を鳴らす。また腰に手を当てたポーズが様になってる。

けれど俺の関心はそんなところにはない。そんなところは、ハイパーセンサーは感知しない。

・・・鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』。その機体で最も目を引くのは、特徴的な4枚のフィン・アーマーを従えてるところにある。

他の武装はというと、右手に見える2mを超す巨大な銃器——
検索完了。67口径特殊レーザーライフル スターライトmk？。
ISは元々宇宙空間での活動を目的に作られているので原則空中に浮いている。そのため、自身の背丈より大きな武装を装備していても問題ない。

アリーナの直径は200m。銃口からの発射から目標到達（要は俺だ）までの予測時間0.4秒。俺が出てきた時点で試合は開始しているため、いつ撃つてきてもおかしくない状況だった。

「最後のチャンスをさしあげますわ」

「チャンス？」

「ええ。わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。当然の結果ですわ。ですから、ボロボロの惨めな姿をさらしたくないというのなら、今ここで謝り、敗北を認めて降参^{リザイン}するのなら、許して差し上げないこともなくつてよ」

「——警告！敵IS操縦者の左目が射撃体勢に移行。セーフティ

のロックの解除を確認』

ISから流れてくる情報を、一度飲み込んでから整理する。そうしないと、あつという間に飲まれてしまいそうだからだ。セシリアにも、白式にも。

「そつというのは、チャンスとは言わないな」

「そつ？残念ですわね。それなら——」

『——警告！敵ISが射撃体勢に移行！トリガー確認、初弾エネルギー装填！』

「お別れですわね！」

「くそつ！」

キューインツ！

耳をつんざくような、独特な音。それと同時に走った閃光が避けそこなつた俺の体を貫く。白式のオートガードが発動し、どうにか俺の体を守ってくれる。直撃は避けたものの、初期化と最適化途中の左肩の装甲が吹っ飛んだ。その直後、遅れてきた衝撃波に左腕がねじ切られるように引つ張られ、体勢を崩す。さらに神経情報としての痛みが稲妻のように走る。

——瞬時に自動姿勢制御を白式が行うが、急激に姿勢を振り回されて一瞬血の気が引く。ブラックアウト防止機能のおかげで気を失うことはなかったが、かなり気持ちの悪い重力を感じた。

『——バリアー貫通。SEダメージ46。SE残量、521。実体ダメージ、レベル低』

（くそつ、俺が白式の反応に追いついていけない！）

ISの戦闘というのは、相手のSEを0にすれば勝利となる。初

シールドエネルギー
期のSEは600。今回の俺の場合は、初期起動のせいか元々の値が低かったようだがしょうがない。攻撃は基本的にシールドが受けてくれるが、一定以上の出力の攻撃を受けるとシールドが貫通される。貫通するとさつきみたいに実体がダメージを受ける。数値化されているSEと違い、こつちのほうはその後の戦闘行為に大なり小なり影響を受けてしまう。

ちなみに、操縦者が死なないように全てのISには【絶対防御】という機能が備わっている。これはSEを貫通し、操縦者に命の危機が及ぶような攻撃を受けると発動する。あらゆる攻撃を受け止められるが、SEを極端に消耗するらしい。実際さっきの攻撃は型だから『多少吹き飛ばされても命の危険はない』と白式が判断したから【絶対防御】は発動しなかったみたいだ。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

射撃、射撃射撃、射撃！まさに弾雨のようにビームが俺を目掛けて『振ってくる』。しかも、セシリアの狙いはかなり正確で、全てを避けるのは無理があった。ガンガンSE^{シールドエネルギー}が消費されていき、白式のエラー音はやむことを知らない。

「バカすか撃ちやがって……。くそ、こつちに装備はないのか？」

装備がないかと思うとすぐに白式から返答があり、目の前の仮想^{ホログラフ}画面に装備の一覧が出る。……一覧？

「……1個しかないんだが」

『近接ブレード』と簡潔に書かれたその武器以外の武装は俺の装備一覧画面には何も書かれていなかった。はて、気のせいだろうか。

はて。

「悩んでる暇はなし・・・か。ええい、ままよっ！」

素手で殴りかかるよりはマシ、と思った俺は近接ブレード<名称未設定>を呼び出しし、展開する。

キィインッ！

高周波の甲高い音と共に、俺の右腕から光の粒子が放出される。それは手の中で形となって、収まった。

片刃のブレード、刃渡りは——1.6mほどだろうか。その長大な『刀』が俺の唯一の武器。

「中距離射撃型のわたくしに、近距離格闘装備で挑もうだなんて・・・笑止ですわ！」

すぐさまセシリアからの射撃。それを身をひねってなんとかかわすが、目の前にあるのは27mという絶望的な相手との距離。今の俺には、数キロにも思える道のりだった。だが——

「やってやるさ」

引くわけにはいかない。激戦が、始まった。

—— ??? side ——

「ここがIS学園・・・か」

『俺』は一応『用事』を終わらせてIS学園までやって来た・・・

・入学式から1週間の遅刻ということになる。別に遅刻事態は気にすることでもないし、どうでもいいが『あの人』には遅刻の理由など関係なしに怒られるだろう。・・・というより殴られるか。

「とりあえず、と・・・まずはどうするか」

「おや・・・どうかしたの？ここは男性は立ち入り禁止よ？」

IS学園の校門の前で立っていたら恐らく教員と思われる女性が話しかけてくる。まあ、普通は男は入れない場所だからな。俺は十分関係者だが。

「えつとですね、俺はこの学生なんですが——」

「ええっ！？と、いうことは君まさかもう1人の——？」

「ええ、その『もう1人』だと思います。それより千冬さ——織斑教諭はどこにいるかご存知ですか？」

「あ、ああ・・・織斑先生ね。織斑先生なら今は第3アリーナで自分のクラスの代表者を決めるための対戦に立ち会ってるはずだよ。あ、ちなみに代表者候補は織斑一夏さんとセシリア・オルコットさんね・・・って、いきなり言われても分からないか」

「いえ、知ってます・・・が、それはともかく織斑教諭は第3アリーナにいるんですね？」

「うん。今は多分第3アリーナ用の管制室じゃないかな」

「分かりました・・・ありがとうございます、行ってみます」

「あ、君、織斑先生と何の関係が——、・・・行っちゃった」

そういつて俺は歩き出した。・・・まだあの先生が何かを言っていたが俺の頭はすでに織村一夏とセシリア・オルコットの対戦に向いていた。

——織斑教諭、千冬さんの弟で俺以外で唯一のIS操縦者、織村一夏。対するはイギリスの代表候補生セシリア・オルコット。確

か移動前に見たデータではオルコットの機体はイギリスの第3世代ISだったと記憶している。それとどう戦うのか。——実に楽しみだ。

「少し走るか・・・対戦を見られなかったら悔やまれる」

と、思い走ろうとしたら管制室がどこなのかわからない事に気づいた。・・・しまったな、さっきの先生に聞いておくんだった。

「誰か通らないかな・・・」

それから俺は、校舎内をうろろしながら、管制室を求めてさまよった。——俺がその後管制室にたどり着いたのは、実に20分以上たった後だった。

—— 一夏side ——

「——戦闘開始から27分。持った方ですわね。褒めて差し上げますわ」

「そりゃ、どーも・・・」

シールドエネルギー

SE残量はもう67。実体ダメージは中破、と言ったところだ。

武器を振るうことはできるが、所々装甲がはじけとんでいて、そろそろ限界が近い。

「このブルー・ティアーズを初見でこうまで耐えた方はあなたが初めてですわね」

そういつてセシリアはブルー・ティアーズの周りを浮いている青アンロック・ユニット
い四つの自立機動兵器を、まるでフリスビーを取ってきた犬のよう

になでた。

フィン状のパーツに直接一特殊（BT）レーザーの銃口が開いているそのパーツはややこしい事に『ブルー・ティアーズ』というらしい。

・・・というよりはその特殊装備『ブルー・ティアーズ』を搭載している実験機1号機だから同じ名前が付けられたらしい。聞いていないのにセシリアがビームを放ちながら話してくれた。・・・もちろん狙いは正確なので凶悪なことこの上ないが。

「では、^{フィナーレ}閉幕と参りましょう」

セシリアは笑みと共に腕を振るい、命令を下す。すぐさま、その命令を受けたブルー・ティアーズ——面倒だから以下ビット——をが二機多角的な直線起動で接近してくる。

「くそっ・・・!」

俺の上下に回ったそれらビットの先端が発光。レーザーを放ってくる。それをかろうじて防御、あるいは回避しようとする、その隙をセシリアのライフルからビームが放たれる。さっきからずっとこのパターンだった。

「左足、いただきますわ」

——まずい!すでに装甲を失っているそこに攻撃を喰らえば、必ず【絶対防御】が発動する。そうしたらSEは^{シールドエネルギー}確実に0になる。確実に俺の負けだ。ならば、一か八か——

「うおりゃああああっ!」

ガギンツッ！

派手な音と一瞬の花火。無理やり背部の推進機ブースターを噴かして加速する。俺の体はセシリアのライフルの銃身に正面からぶつかった。その衝撃で銃口がそれ、なんとかとどめの一撃を避ける事に成功した。

「なっ・・・！？・・・無茶苦茶をしますわね。けれど、無駄な足掻きっ！」

セシリアは再び距離を飛び、空いているほうの左手を横に振る。すると、それまでセシリアの周囲を回っていた2機のビットが俺の向かって飛んできた。

———そうか、このビットは———。

空間を穿ち、放たれるレーザーをくぐり抜け、一閃。重い金属を切り裂く感触が手のひらに伝わる。真つ二つにされたビットは断面に青い稲妻を走らせ、一秒後に爆発した。———1機撃墜。

「なんですって！？」

「ようやく分かったぜ、こいつの攻略法が！」

驚愕するセシリアに向けて、俺は上段だとツの構えで切り込む。それに対して距離をとるセシリア。同時に手を振るい、ビット2機が俺に接近する。

「この兵器は、お前が命令を送らないと動かない！しかも———」

機動を読み、ビット2の後部推進機を切り裂いて破壊する。スラスタ

「その時、お前はそれ以外の攻撃を出来ない。制御に意識を集中させているからな！そうだろ！」

「・・・・・・・・っ！」

ひくくつとセシリアの右目尻が引きつった。どうやら図星らしい。残りのビットは2機。しかも軌道は実は読みやすいことも分かった。セシリアの狙いは性格だ。だから、あれは必ず俺の反応が一番遠い角度を狙ってくる。

ISの全方位視界接続は完璧だ。けれど、それを使っているのは人間、真後ろや真下、真上なんかはどうしても直感的に『見る』ことができない。送られてくる情報を頭の中で整理する分、そこにはコンマ数秒の遅れが生じる。セシリアはそれを突いてくる。だから、逆に言えば、『どこに飛んでくるか自分で誘導できる』というじちだ、簡単な理屈、自分から隙を見せれば必ずそこに来る。そして俺はそれを待ち伏せするだけでいい。

（やれる。後は集中するだけだ）

右腕の刀を握りなおす。筭との放課後特訓が思わぬところで生きてきた。集中は、剣術の究極にして基礎。繰り返し積み重ねて得た感覚は、鈍っても失われはしない。

（なんにしても、距離を詰めればこちらが有利だ）

セシリアは今のところ近接武器を使っていない。待機状態の可能性もあるが、間合いを詰めてから展開したのでは間に合わないはず。

——俺はやっと見え始めた勝利に、わずかに胸を躍らせた。

—— 千冬side ——

「はああ……。すごいですねえ、織斑くん」

モニター上の――夏（あの馬鹿）の動きを見て、山田君がため息混じりにつぶやいている。確かに――夏はまだISの起動が二回目とは思えないほどの動きを見せてはいるが――

「あの馬鹿、浮かれているな」

「えっ？どうしてわかるんですか？」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしている。あれは、あいつの昔からの癖で、あれをやる時は、大抵簡単なミスをする」

「へええええ……。さすがはご姉弟ですねー。そんな細かいことまで分かるなんて」

「ま、まあ、なんだ……。あれでも一応私の弟だからな……」

「あー、照れてるんですかー？照れてるんですねー？」

「……………」

その山田君の言い方と表情が気に食わなかった私は、何も言わずに近寄った。

「いたたたたっ！へ、ヘッドロックは、やめてくださいっ」

「私はからかわれるのが嫌いだ。覚えておくがいい」

「は、はい、はい……」

山田君にはお仕置きかねてもうしばらく摂関してやろうと思ったが、ドアの方に異質な気配を感じた私はすぐに臨戦態勢に移行した。

「誰だ」

「え？な、なんですか？」

「扉の前にいるのは誰だ。なぜ気配を消している」

「……おかしいな、気配は完全に消していたはずなんだけどな」

そうつぶやきながら、『奴』は自動ドアを開けて管制室に勝手に

入室してきた。

—— ??? side ——

（いやはや・・・この1年で気配を消す事に関してはだいぶ上達したと思つてただけだなあ・・・。相変わらず千冬さんは恐ろしい）

苦笑しつつも、やっと見つけた管制室に入つていった。——管制室の中には千冬さんとおそらく先生・・・?と思われる（制服を着ていない、という点のみでの判断だが）女性と女生徒が1人いた。・・・なんとなく束さんに似ている気がするので、彼女が篠ノ之箒かもしれない。

「お久しぶりです、千冬さ——織斑教諭」

「ああ、久しぶりだな、如月。あの馬鹿のように名前や敬称で呼ばなかったのは褒めてやる」

「あの馬鹿・・・?いや、それはともかく遅れて申し訳ありませんでした」

「遅刻の理由は聞いている。・・・が、以後理由があるつと遅刻した場合は容赦なく罰を与えるから、そのつもりでいろ」

「はい」

「あ、あの・・・」

と、俺と千冬さんが話していたら（おそらく）先生と思われる女性が生を出した。

「そちらの男の子は・・・?」

「山田君、自分のクラスの名簿は見ておくように。・・・彼が、我々のクラスの最後の1人だ」

「ええっ!?!」

「何っ!？」

横の女生徒もずっとモニターを見ていたのだが、さすがに男が最後のクラスメイトと聞いてびっくりしてこちらを向いた。・・・先生までびっくりするのはいかなものか。

「山田君・・・名簿には掲載されていたはずだぞ、如月刹那、性別は『男』、と」

「とりあえず自己紹介を・・・んっ。ある事情から入学式から1週間来れませんでした、IS学園に入学した如月刹那です。よろしくお願いします」

「あ、ああっ、そういえば最後の1人は男の子って言ってましたね!」

「思い出すのが遅いぞ、山田君」

何はともあれ、俺は自己紹介を終えたので、出来ればそちらもしてほしい、という意味を込めた目を山田先生?に送ってみる。そうするとたんに真っ赤になってなにやらつぶやき始めたが、千冬さんが自己紹介を促してくれた。・・・何をつぶやいていたかは今後のためにも知らないほうがいいと結論しておこう。

「えっと、山田真耶です。如月君のクラス、1年1組の副担任です。よろしくお願いしますっ」

「はい、よろしくお願いします」

「ちなみに私が1年1組の担任だ」

「あ、はい・・・よろしくお願いします」

そうかもしれないと考えてはいたが、やはり千冬さんが担任だった。・・・鬼の教官の下につくのは初めてではないのでまだいいが、他のクラスメイトはよく耐えられるものだと思ってしまう。

「・・・・・・・・」

「えーと・・・・・・・・」

そしてそれ以上に気になるのは、さつきからずっと俺を見つめてきている女生徒の存在だ。・・・どうしよう、自己紹介をしたほうがいいのだろうか。と、思っていたら千冬さんがその女生徒に自己紹介を促してくれた。

「篠ノ之、自己紹介をしろ。こいつが最後のクラスメイトだ」

「・・・・・・・・はい」

篠ノ之・・・・・・・・ということはやはり彼女が――

「篠ノ之、箒だ。よろしく頼む・・・・・・・・」

「ああ、よろしく」

「その、篠ノ之、というのはだな・・・・・・・・」

「ああ、知ってる。俺実は束さんとはばらく一緒にいたから」

「何っ!？」

「ええっ!?!? そうなんですか!?!?」

・・・・・・・・篠ノ之だけではなく、山田教諭まで驚いていた。しまったな。

「そういえば束さんは――」

ゴスッ!

「現在指名手配の人間だ。その人間と一緒にいたなどと軽々しく口にするな、馬鹿者」

「・・・・・・・・すみません」

相変わらず威力がある……。しかも、出席簿なんていう武器まで装備して……。何も角で叩かなくてもいいじゃないか！普通に痛い！

「山田君、それに篠ノ之もだ。今聞いたことは忘れる、いいな」

「え、で、でも——」

「如月そのものがイレギュラー——というより少々特別な事情がある。なのでその存在に関わることは最重要機密扱いとなる。よって、こいつが束と会っていたというのも機密事項だ」

「えつと……。それはつまり——？」

「こいつ——如月は、IS専門の特殊部隊、通称 イージス に配属されている」

「ええっ！？その年ですか！？」

IS専門の特殊部隊—— イージス。それはISを操縦できるものであり、なおかつある特殊なコアを使用したISの専属パイロットのみが配属される特殊な部署だ。

それは各国家で1個ないし数個のコアを提供し、そのコアを使った国という枠に収まらない完全中立の特殊部隊のことだ。

——完全中立のIS部隊。それは簡単に言うと、各国家のパワーバランスがISの所有機体数によって決まってしまう現在の世界情勢を見て、主要国家が話し合った末に導き出した1つの妥協案だった。

現在のISのコアの総数467個。そのうち実に30〜40個ほどがここに所属していると言われている。

……。言われている、というのは各国家がどれだけ出しているのが未だに不明瞭だからだ。なぜかという、各国家に配られているコアの数が全世界で知られているが、そこからイージスに何個提供しているかによって、その国家の力が弱まるからだ。だから、提供数は原則どの国も明かしていない。俺は一応日本出身、日本からコ

アを提供されている、ということになっているが厳密にいうと違うのだがそれはまあおいおい話すでしょう。

——何はともあれ、俺は完全中立のIS部隊 イービス にいる。その任務は大きく言うと3つに分けられる。

1つ、『ISのパワーバランスが崩れ、ISを使った戦争が起こった場合にイービス所有の軍事力（ISの事だ）によってISを破壊する』。ISというのはパワーが強すぎるため、多くの死者や建物などが破壊されかねない。それを止めるための抑止力となるのが一番の目的だ。これはパワーバランスの現状維持、というのも任務の1つだ。

2つ、『各国家の軍に入隊ないし潜入し、その国が現在開示している情報よりも過剰、あるいは国家間のパワーバランスを崩しかねない開発をしていないかを調べる』。これは各国家の首脳陣はイービスと繋がっているために、秘密裏、内密に入隊なども可能なために出来る任務だ。イービスに参加していない、あるいは協力を拒否する国は潜入という形になることが多い。俺が一番多くこなした任務がこれだったりする。というより現状この任務が一番多い。もちろん開示していない情報の中でパワーバランスを崩しかねないものは強制的に情報開示を行うが、基本的にそこまでのものは現状開発できていない。

ちなみにイービスに入隊した場合は、『国に所属してはならない』というのがある。そしてこのイービスで入手した情報は絶対にもらしてはならない、というのも。その理由は簡単で、各国家のISの開発情報は公開しなければならない条約があるが、全てをさらけ出している国など存在しない。なので一方の国からだけ情報が流れていたらパワーバランスが崩れる。それを考慮しての『国に所属しない』ということだ。

そして任務3つ目。これが一番重要で、『IS学園に入学できるものは入学し、各国の最新鋭ISの性能を調べる』という任務だ。これはIS学園という場所が世界で唯一情報公開しないでいいISの研究機関だからだ。だから各国の最新鋭ISの専用機持ちが数多くこの学園に入学している。なので俺以外にも現在2名・・・いや、『彼女』を含めたら3名か。俺を含わせて4名のイーリス所属の隊員が入学している。今期入学は俺だけだが。イーリスのIS操縦者の平均年齢が20代中盤から後半のイーリス隊員のなかでも10代前半の人材は少ない。元々精鋭ばかりを集めたイーリス隊員のため、IS学園に入学できる人材なんてほばいない。全学年あわせても1人。あるいは0人というのがほとんどだったが、なぜか去年から10代の人員が増えていた。基本的に孤児の軍人や各国家の中でも古い軍人の家柄からの志願者から選抜されているイーリス隊員だが、現役のIS操縦者の中でIS学園に入学してるイーリス隊員が4人もいるのは異例中の異例だった。

「確かに俺はイーリスに所属はしていますが、IS学園に入学した以上は現時点では一時脱退扱いになっています。まあ、特殊任務等が入ると抜け出す事になってしまいますが、基本的には忘れていただくさつて結構です」

「そ、そうですね・・・。分かりました、覚えておきますね」
「お願いします」

そう、IS学園には規則が大量にあるが、その中に『特記事項』というのがある。55個あるその特記事項だが、特記事項第21、『本学園における生徒はその在学中においてあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されない』というものがある。しかしこれはイーリスの『特命』には関係ない。イーリスの特命とは、さっき説明した1と3の任務が該当する。任務2は他のIS操縦者メンバーで代行で

きるが1の場合はとにかく数がいるため、入学中でも専用機を持っている場合は駆りだされる。任務3については・・・これこそ入学中に一番多い任務だろう。各国の専用機がデータと一致しているか、などをイーリス本部に報告する。まあ定期連絡さえ行っていれば特命などは発令されない。

「ところで今戦っているのが織村一夏君ですか？」

「え、あ、はい。織斑くんと織斑くんの専用IS、白式です！」

「専用機か・・・まあ世界初の男性IS操縦者、ということになってますからね」

「えっと・・・如月君にも一応日本政府から専用機持ち、と情報が入ってますけど・・・」

「俺のはイーリス所属のISです。日本政府に協力してもらって日本製の専用機ということになっています。これはIS学園上層部にも提出済みです」

「は、はいっ。分かりましたっ」

ちなみに俺は対外的には『世界で2番目にISを動かした男』ということになっている。発見後すぐにIS学園に入学、ということになってはいるがそれは情報操作によって国の上層部しか知らない事実だ。一般人には明日の朝IS学園の入学式前に2人目のう形で報道される、とイーリスの上官に言われている。・・・下手に隠してIS学園に入学後に情報が流れるよりは先に流してしまっただけが情報操作が楽なんだそうだ。

「とりあえず一般の生徒として扱ってもらえると幸いです。・・・篠ノ之さんも、よろしくな」

「は、はいっ！がんばります！」

「ああ・・・。よろしく頼む」

山田教諭が少し心配だが篠ノ之に関しては特に情報漏洩などに関しては問題ないだろう。なにせ彼女自身が篠ノ之束の『妹』として様々な制限や居場所特定を避けるための移動を強いられてきているはず。言ってしまうえば俺と似たような境遇なので理解はしてくれるはずだ。

「それで、現在の戦闘状況はどんな感じなんですか？」

これ以上イージスについて語る事もないと思い織斑とオルコットの戦闘のことを聞く。すると篠ノ之はモニターに目を戻し、教諭2人は現在の状況を説明してくれた。

「織斑の機体はついさつき来たばかりでな。仕方ないので現在初期^{フィット}最適化をやりながら戦闘している」

「言われてみれば確かに動きが鈍いような・・・」

「それはあの馬鹿のせいだから機体は関係ない」

「厳しいですね・・・身内なのに」

「オルコットさんの機体はイギリスの第3世代機、ブルー・ティアーズです。これは——」

「4機のフィン型—特殊（BT）レーザー発射機構搭載の自立機動^{ユニット}兵器、『ブルー・ティアーズ』搭載型・実験試験機第一号、ですよね」

「あ、は、はい。知っていたんですね」

「一応現在ここにある専用機全てのデータは入っています」

「現在双方のSE^{シールドエネルギー}は織斑が67。オルコットは480だ。機体ダメージは——見ての通りだ」

「オルコットのブルー・ティアーズは小破、織斑の白式は中破・・・ボロボロですね」

「元々技量に天と地の開きがあるからな。このままだと勝てんだろう」

「まあ代表候補生と戦えてる時点で善戦だとは思いますがね」

俺と教諭陣2名が話している間も篠ノ之はモニターをずっと見ている。顔は心配しているというよりは——なんだろう、めっちゃくちゃ険しいんだけど。まるで『負けたら殺す』的な視線だと思えてしまう。——と、感じていると篠ノ之の目が少し開いた。何か進展があったんだろうと思い、俺も視線をモニターに移す。

—— 一夏 side ——

「——獲った!」

「かかりましたわね」

「何っ!？」

セシリアの間合いに入った俺は残った2機のビットを1機は切り落とし、もう1機は回し蹴りで吹き飛ばす。——ライフルの標準をあわせるには間に合わない。確実に一撃いれられるタイミングだった。しかし、セシリアが不敵な笑いをしていることに気づいた時には遅かった。

グンッ——

セシリアの腰部にあるスカート状のアーマー。横にあるその先端が外れて、動いた。

「ブルー・ティアーズは6機ありましてよ!」

回避が間に合わない。しかも、レーザー攻撃を行うビットではなく、こいつは『弾道型^{ミサイル}』だった。

ドツカアアンツ！

赤を超えて白い爆発と共に俺は爆炎に包まれた。

―― 刹那 side ――

「一夏あつ！」

「織斑くんっ！」

ミサイルを避けきれず、爆炎に包まれた織斑を見た瞬間、モニターを見ていた篠ノ之と山田教諭は声を上げた。・・・千冬さんはさすがに声を上げなかったものの、心配そうにしている――と思う。表情が全く変わらないからなんとも言えないけど。

そしてしばらく待つと煙が晴れてくる。煙が晴れた後も浮いている織斑の姿を見て、俺以外の全員が安堵の息を吐き、千冬さん以外の2人は驚いていた。

「―― ふん。機体に救われたな、馬鹿者め」

ファースト・シフト
「一次移行ですか」

残っていた煙を吹き飛ばしつつ、純白の機体は空を駆けていた。

―― そう、新たな姿を携えて――。

―― 一夏 side ――

『フォーマット フィッティング
初期化と最適化が完了しました。確認ボタンを押してください。確認ボタンを押してください――』

（な、なんだ・・・？）

ミサイルにあたる直前、頭に直接情報が流れてきて、目の前に確

認と光るボタンが現れた。良く分からないままも、反射的に確認ボタンを押した。

キイイイインツ！

すると、甲高い音と共に、爆発の瞬間にその衝撃を流しつつ俺を包む白式が光の粒子に弾けて消えて、そしてまた形を成していく。

「これは・・・」

新しく形成されたIS装甲はまだぼんやりと光ってはいるが、さつきまでの実体ダメージが消えていて、より洗練された姿に変わっていた。

「ま、まさか・・・ファースト・シフト一次移行！？あなたまさか、今まで初期設定の機体で戦っていたっていうんですの！？」

どうやらようやく戦闘開始前から行っていた作業が終了したらしい。つまり、やっとこれでこの機体は俺専用になったというわけだ。改めて機体を見ると、最初の工業的な凹凸は消え、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的などこか中世の鎧を思わせるデザインへと変わっている。そして何より変わっていたのは、俺の右手に合った武器だった。

——近接特化ブレード・雪片式型。

日本刀から生まれたようなその刀身は、刀より反りのある太刀に近い。鎬にはわずかに溝があり、そこから呼応するように光が漏れている。妙に機械的なそれは間違いなくIS装備として作られたものである事を示していた。

それに何より、その名前が特徴的だ。

——雪片。それは、かつて千冬姉が振るっていた専用IS

装備の名称。刀に型成した形名。それが雪片。

・・・ああ、まったく。つくづく思い知らされる。

「——俺は、世界で最高の姉さんを持ったよ。」

三年前も、六年前も。そしておそらく、十五年前も。あの人はいつでも俺の姉だ。でもそろそろ、守られるだけの関係は終わりにしよう。これからは——

「俺も、俺の家族を守る。」

「・・・は？あなた、突然何を言って——」

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」

元日本代表の、その弟。それが不出来では、格好がつかない。そう、あの格好いい千冬姉が格好つかないなんて、「冗談もいいところだ。しかも、笑えない。」

「というか、逆に笑われるか」

「さつきから何を——ああもう、面倒ですわ！」

俺がわけのわからないことを言い出したのに焦れたのか、セシリアはまたミサイルを装填し、撃ち出してきた。またあの多角形直線機動だ。しかも射撃型ビツトよりも早い。だが——

（見える・・・！）

右手を握り締める。応えるように、低い機械音を鳴らす。雪片式型。使い方なら分かっている。千冬姉に隠れて何度も見た試合の映像。そこでどう千冬姉が剣を使っていたのかを覚えている。

ギンッ——

横一線。両断されたミサイル型のビッドは、けれど慣性のまま俺の横を通り過ぎて、爆ぜた。

ドゴオオンッ

爆発の音を聴き、衝撃が背中に届くより速く、俺は再度セシリアへと突撃する。機体の瞬間加速度、センサー解像度はさっきまでの非じゃない。圧倒的に使いやすい。

「おおおおっ！！」

手の中でエネルギーが密度を増して、剣に伝わっていくのを感じる。刹那、雪片の刀身が光を帯び、より強い力の存在を俺に伝えてきた。

（いける・・・！）

セシリアの懷に飛び込んだ俺は、下段から序段への逆袈裟払いを放つ。——が、その斬撃があたる直前に決着を告げるブザーが鳴り響いた。

ビ——————ッ

『試合終了。勝者——セシリア・オルコット』

「・・・え？」

「・・・はい？」

なぜか敗北が決まった俺も、なぜか勝利が決まったセシリアも、「なんで？」という顔をして呆けていた。そしてそれは、第3アリ

―ナに詰めかけていたギャラリーも、ピット内で試合を見守っていた筈、山田先生もだった。

ただひとり、いやふたり？千冬姉といつのまにかピットに入ってきている男だけが「やれやれ」という顔をしている。

何が起こったかわからないまま、試合は終了して、結果俺は――
――負けた。

第9話 クラス代表決定戦（後編）（後書き）

思ったよりも文字数が多いな・・・と想ったりしますが、オリ主の刹那君所属の組織なんかの説明が結構長いです。こういう強力な兵器が突然出てくると当然完全中立の国関係なしの組織が出てくると思うんだけどなーと想ったので作って見ました。

ISの世界では生徒会長なんか怪しいなーとか思ったりもしていますが、とりあえずここから原作が少しずつ崩していきます。

感想・アドバイス等あれば、送ってくれると嬉しいです。

脱字の報告を受け、修正しました。・・・セシリアが英国ではなく仏国と書いていたようです・・・何箇所か同じミスがあったため、どうやら書いていたときの頭の中ではそうなっていたようです・・・お恥ずかしい。他にも日本 二本になっていたなど変換ミスがありました。もし誤字を見つけたら、ご一報くださると嬉しいです・・・。

第10話 単一使用能力（ワンオフ・アビリティー）

—— 一夏side ——

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果が、大馬鹿者」

試合が終わり、負けた俺は馬鹿者から大馬鹿者へとレベルアップしていた。すげえ嬉しくない。ダウンではないのが千冬姉らしいといえばらしい。

「武器の特性を理解せずに使うからあなるのだ。身をもってわかっただろう。明日からは訓練に励め。暇があつたらISを起動しろ。いいな」

「・・・はい」

頷く。頷くしかないよなあ・・・。あんな大見得切って負けりやあさあ。と、思っていたら一次移行を終えた白式の状態を見るためにコンソールに向かっていた山田先生とさっきの試合中にも見た男子が歩いてきた。

「えっと、ISは今待機状態になってますけど、織斑くんが呼び出せばすぐに展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいね。如月君、お願いします」

「はい。一夏、受け取れ」

どきっ。

どさつつていったよ、今。目の前にあるこれはなんだ？IS起動における規則事項と書かれた本を如月？と呼ばれた男子が手渡してくれた。これ、『アナタの街の電話帳』じゃないのか？すげえ分厚い上に、一枚一枚がめちゃくちゃペラ紙なんだけど・・・何ページあるんだよ、これ・・・。

「それと、明日には紹介されますけど、一応紹介しておきますね。彼は、如月刹那くん。織斑くんのクラスメイトですよ」

「えっ！？クラスメイト！？それに、刹那だって！？」

驚いてその男子を見ると、頷いてきた。・・・どうやら本人らしい。3年前よりも大人っぽく、男らしくなっていたので最初見たときは気づかなかったが確かに見覚えのある顔だった。

「よ、久しぶり。またあえて嬉しいよ、一夏」

「あ、ああ。久しぶりだな。お前もISを動かせたのか？」

「まあ、ちよつとあつてな。時期的にはお前の後だな。だから急遽IS学園に入学する事になっちまった」

どうやら俺の後にISの起動に成功してしまったらしい。だが、この女地獄のIS学園で男の味方が増えるのは嬉しい事だ。

「ところで今まで普通の学校に通っていたのか？だったらお前もISのことは――」

「いや、俺は軍にいたんだよ。だからISの事はある程度分かっている」

「あ、そうですか・・・」

「だから、明日からお前にISのことを教えるよう言われた。明日からよろしくな」

「あ、ああ。よろしく頼む」

どうやら俺のように前知識が全くない状態からのスタートということではないらしい。羨ましい限りだ。

「何にしても今日はこれでおしまいだ。帰って休め」

敬う気持ちのない命令だった。半分がやさしさで出来ているというバ。アリンを見習ってほしい。というかこの人、俺が守る必要が本当にあるのか・・・？

「帰るぞ」

はい、出ました。俺の周りのやさしさ欠乏症人物ナンバー2。名前は冪冪って言うんだけどね。俺の幼馴染のはずなんだけどね。

・・・やれやれ、帰るか。俺は重い腰をあげて寮に戻ろうとする。

「ああ、一夏。俺も今日から寮に入る予定だから、よろしくな」

「ああ、そうなのか？・・・というか男のお前は部屋、どうするんだ？」

「1人部屋だつて言っていたな。・・・ですよね、織斑教諭？」

「ああ。如月は1人部屋を希望していたからな。廊下の端の物置を片付けただけの狭いところだが、本人がそこでいいと言っているからそこを与えた」

「と、いうわけでまた夜にでも会おう、一夏」

「おう。夕飯は一緒に食おうぜ」

「ああ」

そう言っただけで刹那は千冬姉となにやら話があるのか、部屋から出て行った。・・・それを山田先生は慌てて追いかけていった。山田先生はどうしても初動が遅いなあ・・・あの2人に比べたら、だけど。

「・・・・・・」
「・・・・・・」

そして寮への帰り道。箒と帰っているんだが、なぜかじろじろと箒が俺を見てくる。・・・なんだろう？

「な、なんだよ？」

「負け犬」

「ぐはっ」

なんだこいつ。死人をHP1で蘇生させて装備なしでダンジョンに送り込む神父か？ちなみに値段は超ぼったくり。『悪魔は人の中^{デビルズ・イン・ザ・マン}にいる』とはよく言ったものだ。まあ悪魔を被った人（千冬姉）もいることだし珍しい事でもないか。

「一夏」

「ん、なんだ？」

「その・・・なんだ、悔しいか？」

「そりゃ、まあ。悔しいさ」

「そ、そうか。それなら、いい・・・」

何がいいんだろう。俺が負けたのがいいんだろうか。ひどいやつだ。

「あ、明日からは、ISの訓練もいれないといけないな」

「あれ？刹那が俺に教えてくれるって言ってたぞ？」

「あ、あれは、織斑先生が頼んでいたから・・・！あの後私が教えている事を話したら、一緒に教える事を納得してくれた！」

「あ、そうなのか」

「そうだ！それとも、私が教えるのは不服とでも言うつもりか！」

「いや、別に。教えてくれて嬉しいよ」

「そ、そうか……。嬉しいのか。……。なら、いい」

良く分かんが、一応ISのことは教えてくれるらしい。束さんの妹だからISにも詳しいだろうし、先生役は確保できたようだ。

「よし、ではこの私が教えてやろう。特別にな」

特別に、をとて強調された気がする。でもまあ、実際ありがたいしな。この先も女子に負け続けるとなると、俺の男としても矜持は確実に死ぬ。今でも半分死んでいるのに、完全に死ぬ。

「では、明日から必ず放課後はあけておくのだぞ、いいな？」

「おう」

どうせ入る部活もない（全部女子部だからだ）し、ちょうどいい大体、千冬姉に恥をかかせたままではいられないし、なんとしても今より強くならなくてはならない。

「ところで簿」

「うむ、なんだ？」

おお、上機嫌だ。俺は先刻から抱いていた疑問を素直な気持ちで投げかけてみる。

「さっきからそわそわしてるけど、もしかしてトイレに行きたいのか？」

バシーン

どこから取り出した竹刀の音が響いた。

―― 刹那 side ――

「では、お前の部屋は1階の端の元物置、100Aだ。元々が物置なので鍵の予備がない。なくすなよ。再発行が面倒だ」

「了解、織斑教諭」

「それと、一応言っておくが・・・束の事は絶対に口外するな」

「分かっていますよ。さつきみたいなへまはしません」

「ならばいい。では、『明日は』遅刻するなよ」

「はい」

明日は、というところを強調すると、千冬さんは去っていった。

俺も好きで遅刻してきたわけじゃないのだが・・・と思いつつ、部屋に入った。

「わお・・・物置だったわりに、綺麗だな」

きちんと掃除をしておいてくれたおかげで、誇りもなく意外と広い部屋が見えた。

「普通の部屋より狭い、とか言ってたけど1人部屋である以上、あの意味相部屋より広いかもしれないな」

俺の私物は少ない。イージスの隊員証と潜入用の私服数着、後はPCと携帯くらいしかもっていない。3年前からずっと軍から軍に移動を繰り返しているとさすがに私物を多く持っているのと邪魔になるほが多い。

「さて・・・荷造りなんかはいつもどおりないし。・・・どうするか」

本音を言えば『彼女』と今日中に接触したかったのだが・・・現在、時刻は１８時。相手の部屋番号も知らないし、何より基本女子寮であるここを俺がうろつくと帰って面倒だ。

「っと、そういえば夕飯っていつでも食堂には行きたくないな」

まだ政府から発表されていない以上、俺がここにいるということあまり明かしたくない。・・・仕方ない、自炊でもするか・・・と思ったがここは元・物置。当然水周りなどはないので自炊などできない。

「普通の部屋は水道くらいいついているとか言ってたっけ・・・あれ、シャワーどうするんだ、俺」

大浴場が使えない、というのは聞いていたので軍にいた時のようにシャワーでいいか、と思っていたが物置だったのならそんなものは当然ないはずだ・・・と思ったのだが。

「おお・・・入り口の横の扉の中はトイレと兼用のシャワールームだったのか」

どうやら改装工事やらなにやらして、シャワーとトイレを作ってくれていたらしい。・・・ついでに自炊もできるように水周りも簡易的でいいから欲しかった。

「今日は軍用のレーションでいいか・・・どうせ明日には食堂も使えるようになるしな」

そう思って持ってきていたバックの中から食べなれたレーションを取り出そうとしたら部屋がノックされた。

— 夏side —

「えーと・・・1階の端。元・物置となると・・・ここか？」

一応この寮は学生全員を収納しているため、やたらとでかい。しかも1階は1年、2階は2年。という風に学年別に階が違う。なのでどうしても横に広くなっている。・・・ちなみに千冬姉なんかの寮住まいの先生やここの職員は4階に住んでいるらしい。用がないなら来るな、というありがたいお言葉と共に千冬姉が教えてくれた。

「100A・・・急増で造られたからか1つだけ英数字だ・・・」

俺の部屋のように基本的に1025とか、数字で番号が振られているが、この部屋だけ英数字が使われていた。おそらく刹那が卒業したらまた物置に戻るのだろう。

「おーい、刹那、いるかー？」

ノックをしながら部屋の中に声をかけると、返事が帰ってきた。

「・・・一夏か？周りに誰もいないか確認してくれ」

・・・？変な事を気にするヤツだな、と思いつつも一応確認する。
・・・よし。誰もいない。

「誰もいないぞー」

「なら、入ってくれ」
ガチャ

ようやく入れた、と思っていたらすぐに部屋を閉めて、鍵までかけがった。

バタン。ガチャ

「これでよし、と」

「いや、何がよしなんだ」

まさか密室で俺に何かをするつもりなんだろうか・・・などという馬鹿なことを考えていたら刹那が呆れ顔でこちらを見ていた。

「俺はお前を襲うつもりなんてないぞ・・・。ただ単に、俺は明日の朝のニュースで報道されるから、今はまだ騒がれたくないだけだ」
「あ、そうなのか」

まあ男子がいると分かったら俺のときみたいに騒ぎ立ててまた女子が迫ってくるだろう。その恐ろしさを俺は知っているため、さすがに刹那にも同じことにはなって欲しくない。・・・明日にはどちらにしろ迫ってくるだろうが。

「んじゃ、夕飯もここで食ったほうがいいか。俺がもらってきてやるよ。何がいい？」

「お、そうか？悪いな。といっても何があるんだ、ここの食堂」

「結構あるぞー。和洋中・・・何でもありだな」

「んーA定食とかB定食とかそういうのはあるのか？」

「日替わりならあるけど・・・それでいいか？」

「ああ、日替わりでいいや。基本的になんでも食べれるから問題はない」

「OK。んじゃ、ちよつと待っててくれよな」

そういつて一旦刹那の部屋を出る。少し歩くとまた女子に見つかったが、千冬姉に呼ばれている、と言ったら離れていった。・・・後でバレたら殺されるかな、俺。

—— 刹那 side ——

「ふむ・・・。1年の専用機持ちは現状1組2名、4組1名だけか」

俺は一応覚えてはいるが、再びIS学園の生徒のデータに目を通していた。いつ任務が入るか分からない以上、暇な時間には色々なデータを見直しておくべきだろう。しばらくそうしてデータを見ていると、扉の外に人の気配を感じたので、PCの電源を落として扉の前に立った。

「刹那ー、俺だー」

「一夏か。傍にるのは誰だ？」

「あれ？良く分かったな。箒だよ。俺が刹那の部屋で食べるって言ったらついてきたんだ」

「別にいいだろう、一緒に食べても。それとも、何か不都合でもあるのか？」

「いや、別にないけど・・・刹那、あけてくれ。そろそろ腕が疲れてきた」

「周りには誰もいないな？」

一応気配がないので大丈夫だとは思うが、ここは一流のIS操縦者を育てる教育機関だ。俺のように特殊部隊出身などの気配を殺す事に長けている人物がいるかもしれない。

「ああ、いないよ。だからあけてくれ」

「分かった」

ガチャ

「すぐに入ってくれ」

「ああ。ほら箒、先に入ってくれ」

「・・・分かった」

2人が入ったらすぐに扉を閉めて鍵をしめた。箒は怪訝な顔をしたが、一夏が事情を話したので納得はしてくれたようだ。・・・やれやれ、これからずっとこんな警戒をしながら暮らすのか。まあ、軍に潜入する時と比べるとまだマシだが。

「ほれ、刹那。これが日替わり定食だ。といつても俺のも同じだけだな」

「ほー、これは美味そうだな。ん？篠ノ之のも同じか」

「・・・悪いか？」

「いや、悪くはないけど・・・」

うーむ。どうにも篠ノ之には警戒されているらしい。・・・それもそうか。一夏と千冬さんの知り合いで、あまつさえ姉の束さんと一緒に住んでいたといっている男が自分の知らない人間なら誰でも警戒する。

「ところで如月・・・だったな？お前は何者だ」

「何者とはまたすごい聞かれ方だな。ん、まあ・・・3年前にちょっとあってな、千冬さんに拾われて一時期・・・3ヶ月くらいだけ？ともかく少しの間一緒に暮らしていた。その後はまあ・・・色々あってな。各地を転々としてたりして、束さんとは2年くらい前かな？に会って、・・・色々あって別れて今はIS学園に入学している」

「そんな説明でわかるわけがないだろう！色々あつてが多すぎる！」
全くだ。でも、イービスのこととか、・・・俺が受けた人体実験とか。話せない事が多すぎる。

「まあまあ、落ち着けよ、箒。人にはいろんな事情があるし、俺もお前が引越してから事は知らないぞ？」

「うっ、そ、それは・・・」

「だから人のことを根掘り葉掘り聞くのはよくないことだつて」
「う、むう・・・」

確か篠ノ之は束さんが特別指名手配されてから、重要参考人として各地を転々としていたんだっけか。まあ束さんは連絡先を教えていたというし（その割りに一度も会話しているのを見た事がないが）色々大変だったんだろう。

「すぐに信用してくれとは言わない。ただ俺の今後の態度や何やらを見て、信用に足る人物か判断してくれ」

「いや・・・織斑先生が認めているんだ。それで十分だろう」

そういつて篠ノ之は一応納得してくれたようだ。いずれ話せるようになったら一夏にも話さないといけないと思っていたし、その時は篠ノ之にも話しておくか。

「そういえば刹那。お前、ISについて詳しいんだよな？」

「まあ軍属だったし一般人以上には詳しいぞ」

「じゃあ、さっきの試合、何で俺が負けたのか分かるか？」

「ああ、そりゃお前の武器の特性のせいだよ」
「特性？」

何かと思ったらそんなことか。どうやら一夏はさきほど渡された資料を読んでいないらしい。IS起動規則の分厚い本と一緒に渡しておいたはずなんだけどな。

「一夏のIS、白式には『ワンオフ・アビリティ単一使用能力』が搭載されているんだ」
「ワンオフ・アビリティ単一使用能力？」

「やっぱ知らないか。えつとな、一夏。ISの核となる部位『コア』に自意識のようなものがあるのは知っているか？」

「ああ。束さんがそう作ったんだよな？」
「そこまでは知っているか」

そう、AIのようなものが全てのコアには宿っている。しかもこれは、進化するようにロジックが組みまれているというのだから束さんの凄まじさをつくづく思い知る。

「そのコアなんだけどな。ずっと一緒に戦っているとある種の『相性』ができてくる。それが最大になると発動するのが単一使用能力だ」

「相性が最大・・・ね。でも俺、今日始めて乗ったんだけど」

「そこは俺も分からないが・・・それにたいい単一使用能力が出るのは二次移行以降だ」
セカンド・シフト

「二次移行？」

「お前は本当にもう少し勉強したほうがいいな・・・二次移行とは、ファースト・シフト一次移行によって操縦者個人の専用機になった後に、ある程度の戦闘をこなした後に、これもまた相性によって左右されるらしいが・・・とにかく時間が経つと機体がより操縦者の望む形に変化するんだ。それを二次移行という」
セカンド・シフト

「ふむふむ・・・でも俺、一次移行が終わったと思ったら発動してたぜ？」
ファースト・シフト

「それが良く分からないのだが・・・まあそういうこともあるのか

もしれないな」

「そうなのかぁ・・・」

実際、何で白式が単一使用能力が発動したのかは山田教諭が調べていたが分からなかったらしい。東さんが絡んでいる、と千冬さんがこっそり俺に言ってくれたのでおそらくそのせいで色々規格外な能力があるのだろう、と思っておく。

「で、白式の単一使用能力ってどんなやつなんだ？」
ワンオフ・アビリティ

「んー・・・実は白式のは千冬さ、・・・織斑教諭が使っていたISと同じらしい」

「え？そうなのか？」

「ああ。本人が言っていたし間違いない。あの人が第一回モンド・グロツソで使っていたIS、『暮桜』と同じだ」

「そういえば白式の武器が『雪片式型』しかないのもそれと関係あるのか？」

「あるかもな。雪片の発展系の武器みたいだし。で、単一使用能力ワンオフ・アビリティだが、名称を『零落白夜』というらしい」

「零落白夜、か。どんな能力なんだ？」

「織斑教諭に聞いたところ・・・触れた攻撃対象のエネルギーを全て消滅させる』らしい」

「エネルギーを全て・・・どうなるんだ？」

何でもかんでも聞いてくるな・・・まあ仕方ないかもしれないけど。とはいってもこのままだと俺も飯を食べられない。ここは篠ノ之に助けを求めるか。

「篠ノ之、分かるか？」

「んぐつ、わ、私か？」

「そう、篠ノ之だ。話に混ざってないとおつまらないだろ。それに一

夏と違ってISの事も分かるかなーと思って」

「べ、別に私は会話などしなくてもいいが・・・」

「いいから、いいから。それで、分かるか？」

「・・・ふむ。全てのエネルギー、となるとたとえばブルー・ティアーズのビーム攻撃などはじく事が出来るのではないか？」

「って、剣でかよ！どんな達人だよ、それ！」

「いや、出来る。ISのハイパーセンサーのおかげで『見える』しな」

「見えても無理だろ・・・」

「なに、それも慣れでどうにかなるさ・・・。それで、他には？」

「他か・・・後は、そうだな。シールドバリアーなども無効化できる・・・とかか？」

「正解だ。そう、シールドバリアーも無効化できる。すると、どうなるか分かるか、一夏？」

「えっと・・・シールドバリアーが無効化、消えるってことだよな？その状態で攻撃を受けると・・・」

「当然、危険だよな？するとISはどんな反応を示す？」

「えっと、重火器や武器で直接攻撃されるから、危険だと判断して・・・そうか！絶対防御が発動するんだ！」

「そう、絶対防御が発動する。発動すると、どうなる？」

「シールドエネルギー
SEが激しく削られる・・・ってことか！すごいな、この能力は！」

「ああ。織斑教諭もその能力のおかげでモンド・グロツソで優勝できたらしい。・・・剣一本で優勝できるのはあの人だけだろうけどな」

本当に、今でも恐ろしいと思う。剣一本で全ての遠距離攻撃をいなし、勝ち上がっていた鬼神。あの人には今でも勝てる気がぜんぜんしない。・・・ISで生身のあの人に挑んでも、だ。

「まあ、当然欠陥もあるけどな」

「欠陥？」

「ああ。発動時に自分のSEを消費する」
シールドエネルギー

「ええっ！？それじゃ、使うたびに自分のSEを消費するのかよ！」
シールドエネルギー

「そう。だから欠陥」

「欠陥機なのか・・・」

「欠陥、欠陥いうな馬鹿者どもが」

「ババアンツ！」

「ぐあっ！」

「痛っうっ！」

完全に油断していたところに、後ろから強烈な打撃を受けた。・
・鍵をしていたはずなのにどうして、って教職員だから物置の鍵くらい持つてるか。

「ち、千冬姉・・・いきなりひどいぞ・・・」

「バアンツ！」

「織斑先生と呼べ」

「は、はい・・・」

・・・なるほど、名前で呼んだ馬鹿者とは一夏の事か。実の弟相
手にも厳しいものだ。

「で、何で俺の機体が欠陥機なんです？」

「だから欠陥機ではないといっているだろう。そもそもISは完成
などしていないのだから、欠陥も何もない。ただお前の機体は他の
機体よりも攻撃特化になっているだけだ」

「攻撃特化、ねえ・・・」

「ところで織斑教諭。こんな場所に何のようです？」

「如月の教科書を持ってきてやった。明日から授業だというのに・

・教科書の事を何も聞いてこないとはな、呆れたぞ」

「明日朝一で事務室に行こうと思っていたんですが・・・ありがとうございます」

「うむ。軍に所属していた以上、お前には意味がないかもしれないが、一応目を通しておけ。私の授業で答えられなかったら他のものより思い罰を与える」

「ひでえ・・・」

答えられて当然だから、厳罰か・・・。何気にプレッシャーがすごいな。

「とにかく、明日は教室に行く前に職員室によれ。SHRでお前の事を紹介する前に、他の教職員にも紹介しなければならん」

「了解です」

「それと織斑、篠ノ之。なるべく遅くならないうちに部屋にもどれよ」

「「はい」」

2人の返事が重なった。やはり付き合いが長いからか、千冬さんが簡潔で短い返事を好む、というのは分かっているようだ。

千冬さんが出て行った後は、適当に色々話をしてすごしていた。夜も更けてきたので、2人には部屋に帰ってもらって俺も教科書を軽く見てから、シャワーを浴びてから寝る事にした。

第10話 単一使用能力（ワンオフ・アビリティー）（後書き）

一応単一使用能力の説明ですが・・・相性云々はともかく^{セカンド・シフト}二次移行について良く分かっているんですよ・・・こちら相性や時間経過なんだろうか・・・と思ったので一応そうしてあります。実際はこうだ、などありましたらご一報くださると嬉しいです。

第11話 最後のクラスメイト

―― 刹那 side ――

クラス代表者を決める対決の次の日。一夏に朝飯は適当に取るから俺の部屋に來なくていいと言メールを送り、俺は寮を出た。一応今朝のニュースで報道されることになっているのでその前に寮を出ておかないと面倒な事になる。

「寮を出たのはいいけど・・・どうするか」

現在時刻は午前7時。始業時間まで1時間半もある。職員室に行っても迷惑になるだけだろうし、どうするか・・・と思ったら後ろに人の気配を感じた、と思った瞬間には目をふさがれていた。

「だーれだ」

「しっ！」

声を聞くまでもなく、こんなことをするのは『彼女』以外にいないと思い、背後に向けて本気で肘打ちを放つ。当然、相手はすぐに目を離し離れるが、間合いの外に行くにはまだ遠い。続けて後ろ回し蹴り、喉に手刀、余った手で銃を抜こう・・・としたところで額に彼女が持っていた扇を突きつけられる。

「こらこら、銃はやりすぎよ？」

「そうでしたね、すみません」

反射的に銃まで取ろうとしたのは反省しよう。いくらここがIS

学園でも、常時拳銃を所持している人物はほとんどいないだろう。一般生徒に見られてもしたら言い訳するのが面倒だった。・・・ちなみに俺が放った攻撃は全て避けられている。さすがは、といったところか。

「でも前に会った時より反応は上がってるわね。よきかなよきかな」

「それを確かめるためだけにわざわざ襲ってこないでください、『盾無』さん」

「やだなあ、単なるお茶目じゃないか。これくらい見逃しておくれよ」

俺の後ろに音もなく忍び寄り、本人いわく『お茶目』という一種の暗殺術を使ってきた相手はIS学園の『最強の人物』にして『生徒会長』の更識^{さらしき}盾無さん。一応俺と同じくイージスの隊員であり、現在の俺の直属の上司となる。

「今日当たりに着任挨拶に行こうと思ったんですけど、部屋番号も分からないのでとりあえず生徒会室に行こうと思ってましたよ」
「ん、グッドタイミング」お茶会も生徒会室で行う予定だよん
「じゃ、詳しい話はそこでしましょうか」

そういつて歩き出そうとする俺を盾無さんの一言が止めた。

「織村一夏くん」

「・・・」

「君は彼に久しぶりに出会ってどう思った？君の意見が聞きたいなあ」

「それについても、人に聞かれないほうがいいんじゃないですか？」
「んーじゃ、一言で表すと？」

「・・・一夏に対して俺は『危ない』と思いましたよ」

「ふむ。危ないか」

「ええ。操作技術、状況認識、さらには今まで巻き込まれた事件の数・・・。それらを含めると自身の身も守れない現状、非常に危険だと感じました」

「だから、自分が守ってあげなくちゃ、と思ったと」

「いちいちBLそっちにつなげるのが好きですよ、女性って。盾無さんもそっち系の人でしたっけ？」

「いや？私はただ、一般的な腐女子の感性に従っただけだよ」

「『婦』女子ではなく『腐』女子の感性には従わなくて結構です。・

・そろそろ行きましようよ」

「そうだね、皆も待っているしね。・・・そういえば、一応関係者ではあるから、イージスにはまだ所属していない子もいるけど、気にしないだね」

「俺のクラスの布仏のほとけ本音ほんねさんのことですか？」

「そう。姉の虚うつほちゃんはいージスに入ってるのは知ってるわよね？」

「ええ」

「本音ちゃんの方はまだ操縦技術が足りないからね。まだ入れないのよ」

「まあ、一応了解です。となると残り1人の隊員もすでに？」

「うん、いるよ。ちなみに君が一番下っ端になるから覚悟しておいてね」

「理不尽な命令は拒否しますよ」

「大丈夫よ。・・・理不尽と思わせなければいいのだから」

「・・・相変わらず恐ろしい思考ですね・・・」

とりあえず生徒会室に言って現状の状況確認、任務の確認やら何やらを、済ませてくるとするか・・・。

「それで、一夏。如月とは一体誰なのだ」
「誰って言われてもなあ・・・」

朝。箒と一緒に朝食を食べていたら、いきなり刹那の事を聞かれた。・・・誰といわれても正直困る。

「3年ぐらい前にさ、千冬姉が急に家に連れてきたんだよ。それから3ヶ月ほど一緒に暮らしていた。一応学校にも通ってはいたけど、友達らしい友達も俺らくらいしかいなかったんじゃないかな？」
「織斑先生が・・・？お前はどこから来たのかとは聞かなかったのか？」

「千冬姉が問題ないって言ってたからなあ・・・何か事情があるんだろつし、特に気にしてなかった。」
「全く、お前はいつもいつも千冬さん千冬さんと・・・主体性はないのか、お前は」

まあ正直おかしいかな？とは思ったけど最初に大喧嘩した後は普通に友達になったからな。アイツがどこから来たとかは関係ないよなあ・・・友達関係には。

「それで、なぜ3ヶ月でいなくなっただんだ？」

「知らん。なんか急にいなくなっって、千冬姉が心配要らないって言っただんだよな。・・・千冬姉もその後すぐに1年くらいいなくなっただし」

「？千冬さんもいなくなっただのか？」

「いや、千冬姉に関しては知ってる。その、ドイツ軍に行ったらしい」

「なぜ急にドイツ軍なのだ・・・」

「まあ、それは——」

パンツ！

「いつまで食べている。周りはすでに片付けに入っているぞ」

「ち、・・・織斑先生」

だらだらと話していたら千冬姉に叩かれた。周りを見てみると、なるほど。確かに片付けに入っている。・・・あれ？ 箒も片付けに入ってる？

「後5分で予鈴になる。遅刻したらグラウンド10週を走らせるから急げよ、馬鹿者」

「10週！？って、ちょっと待ってくれよ！」

「待たん。早くしろ」

鬼か、この人は。慌てて食べてすぐに食堂を出る。・・・予鈴になるまであと2分。本鈴まで後7分。このあと部屋に戻って鞆を取って・・・間に合うだろうか。

―― 刹那 side ――

「それじゃ、とりあえず職員室に行ってきます」

「うん。顔見せも終わったし、任務が入るまでは適当にしていればいいよ。ただし、私からの呼び出しがあったら必ずすぐに来る事。いいわね？」

「了解です、上官どの」

「それじゃ、解散」

イージスメンバー3名＋生徒会の役員1名（イージスメンバーの内2名は生徒会の会長と役員なのだが）との顔見せが終わり、俺は職員室に行く事にした。まあ、生徒会室のすぐ近くだから、あまり移動距離はないのだが。

「新入生の如月刹那です。入ってもよろしいでしょうか？」

「如月か。入れ」

「はい」

織斑教諭に教職員の皆さんに紹介してもらい（なぜ校長などではないんだろう、と思ったが聞いてはいけないことだと思った）、俺は担任と副担任について教室に向かっていた。

「如月くん、緊張してませんか？」

「正直、少ししていますね」

「そういうときは手のひらに人と書いて飲み込むといいですよっ」

山田教諭が緊張をほぐそうと色々と話しかけてきてくれるが、横の絶対零度の織斑教諭の威圧感が気になって正直それどころじゃない。

「如月、今日はISの模範演技の時間がある。いつでも戦えるように準備はしておけ」

「あ、はい・・・って、戦うんですか!？」

「当然だ。相手はオルコットと織斑の2名。気を引き締める」

「連戦ってわけじゃなく・・・」

「当然、2対1だ。お前ならできるだろう」

いきなりきついことを言われてしまった・・・。というかあまりIS見せたくないんだけど・・・。

「でも俺って一応、一夏の後にIS動かしただっていうことになってるんですけど」

「それについては問題ない。イージス隊員というのは教職員には伝

わっている。一応生徒にも軍から出向、というのは伝える予定だが
イージス所属だけはばかしておけよ」

「いや、それでも1ヶ月で代表候補生以上の訓練を受けたって事になるんですが・・・」

「軍人と一般人の違いだとしても言っておけ。現時点ではオルコット
も織斑もお前から見たらどちらも新米と変わらないだろ？」

「了解・・・」

ISを見せるのは全生徒参加の学年別トーナメントまで控えてお
こう、とスケジュールを見て考えていたのに全て台無しにされた。

「でもイージスがよく俺が所属していることを明かしましたね」

「正確に言くと現生徒会長からの情報提供があった。イージス本部
の命令とは別だと私は認識している」

「うわぁ・・・独断ですか」

盾無さんも思い切ったことをする・・・。自分達のことは言わな
いくせに・・・と思つたら教職員にはイージス所属つてことを言っ
てあるのか。俺の事を独断で伝えても信じられるくらいだし。と、
考えていると教室の前に着いた。

「お前は『軍から出向』と『日本のコアを使った専用機持ち』とい
うことだけ覚えておけばいい」

「了解です」

「それじゃ、紹介するまではここで待っていてくださいね？」

そういつて教諭2人は教室の中に入っていく。その直後に「
キャーーーーーーーーーッ！！」「」という絶叫？と俺の事を聞く
女子の声で埋め尽くされた。

「先生、今朝のニュースなんですけど――」

「本当なんですか！？2人目の男のIS操縦者がいるって――」

「しかもそれが、私たちのクラスに――」

「静かにしろ、馬鹿者ども」

スパパパーンッッ！！

「ッッはうッッッ」

おー・・・今日は大量のようだ。

「席に着け、今から紹介してやる」

「ッッはい」

しかしやはり話題になってしまっているな。・・・この中に入る
ってすごい勇気があるな。

「さて、山田君。SHRを始めてくれ」

「あ、はい。えっと、それじゃまずは最後のクラスメイトを紹介し
ますね」

先ほど叩かれたからか、一応は静かにしているらしい。だが、視
線がいつせいにこちらのドアに向いたのが分かる。・・・入りたく
ない・・・。

「それじゃ、如月くん、入ってください」

「はい」

シュンッ

目の前に立つと、自動ドアが開いて俺を教室の中に入れてくれる。

――視線がつらい。

「「「キヤ————ッ！！！」」」」
「静かにしろ」
ピタッ

すげえ。騒がしくなったのが一瞬にとまった。

「えーと、如月くんは日本の軍隊に幼いころから所属していたそうです。ＩＳ関連についての知識は元々持っていて、ＩＳを動かしてしまったので入学するようになったそうです。入学式から今まで遅れたのは、専用機の調整と軍から出向する際にいろいろあつて送れたそうです」

山田先生が俺について説明してくれる。しかし軍所属の人間か・
・IS学園でも珍しい部類に入る気がするな。

「先生、しつもん」

「はい、
なんですか？」

「如月君は日本の軍、自衛隊に所属していたっていうことは日本の代表候補生なんですか？」

「いえ、それがですね・・・」

「如月も織斑も男だからアラスカ条約に引つかかるかもしれないということで、現在国際協議中だ。その結果しだい二人とも日本の代表候補生になるかもしれない」

「え、俺もなのか!？」

「そうだ。いづれ政府から連絡が入るかもしれないから、心の準備はしておけ」

「まじかよ……」

どうやら一夏は代表候補生になるかもしれないということを聞いてなかったらしい。俺は元々ここに来る前に日本政府のIS関連の代表議員と会ったりしているのもその時に色々現在の状況を聞いてある。まあ、聞いているからってなりたいかどうかで言ったら代表候補生になどなりたくないのだが。

「それと、クラス代表者は織斑に決定することになった」

「ええっ！？なんでだよ！」

「それは――」

「それは、わたくしが辞退したからですわ！」

いきなりオルコットが立ち上がって腰に手を当てるポーズで言葉を発した。・・・わざわざあのポーズをするのは何か意味があるんだろうか。しかし、何かいいことでもあったんだろうか？昨日の帰るときの表情と比べると上機嫌に見えるのだが――。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のない事ですわ」

すごい上から目線の言葉だ。まあ、たしかに2人の技量は離れてはいるが、その離れた相手に何度も接近されるのは中距離型としてどうなのかと俺は思う。

「それで、まあ、わたくしも大人気なく怒ったことを反省しまして。一夏さん”にクラス代表を譲る事にしましたわ。やはりIS操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」

ふむ。確かに一夏には戦闘経験を積ませたい、と思っていたからありがたい。・・・ん？一夏さん？名前で呼んでたっけ？・・・まあいいか。それと、俺はいつまで前に立っていればいいんだろう。

「いやあ、セシリアわかってるね！」

「そうだよー。せつかく世界で唯一の男子がいるんだから、同じクラスになった以上持ち上げないとねー」

「あれ、ということはもしかして、如月くんでもOK!？」

「そっか、そうだよー！」

「いや、もう決まってるみたいだし俺はいいよ」

「そういうなよ！俺より刹那のほうが軍にいて知識も豊富だし、絶対そっちのがいいって！」

「いまさら返るのは面倒だ。代表者は織村一夏に決定する」

「・・・はい」

さすがに織斑教諭が決定といったら従うか。どちらにせよ俺はあまり目立ちたくない。ただでさえ、いわくつきというか、色々おかしな機能がついてる機体だからな・・・。

「とにかく、代表は織斑くん！」

「私たちは貴重な経験値積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で二度おいしいね、織斑くんはー」

商売してやがる・・・。クラスメイトを売るのが、このクラスは。

「そ、それですわね。・・・わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば、それはもうみるみるうちに成長を遂げ——」

バン！

オルコットが話していると、それを遮って机に思い切り手を叩きつけた篠ノ之が立ち上がった。・・・あー、ISを教えるのどうこうで俺とも揉めたしなあ・・・。また一悶着あるんだろうか。

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。『私が』、直接頼まれたからな」

私という部分を強調して、オルコットに食ってかかる篠ノ之。・・・あれ、俺は？

「あら、あなたはIS適応ランクCの篠ノ之さん。Aのわたくしに、何か御用かしら？」

「ラ、ランクは関係ない！頼まれたのは私だ！い、一夏がどうしてもと懇願するからだ」

ふむ。篠ノ之は適応ランクCだったのか。ちなみに適応ランクとは訓練機で出したISに対する反応速度などを計測した結果をランク別に収めたものだ。俺もA。一夏はBだったかな？まあ、訓練機でやってる以上、あまり意味がないデータではある。

「え、第ってランクCなのか・・・？」

「だ、だからランクは関係ないといっている！」

まあ、最初のランクがどんな結果であつても、最終的に努力しないでぜんぜん違った結果になるほうが多い。でも結構気にしている人がいるからあまり大きな声で言うのはお勧めできないな。さっきのオルコットの言葉もある意味ひどいといえばひどい。

「座れ、馬鹿ども」
バシン、バシン！

と、篠ノ之とオルコットの頭を叩いて強制的に黙らせ、座らせる。
・・・俺も座りたい。

「それと如月。いつまで立っている。お前の席は織斑の横だ。空いている席なんだから分かるだろう。自己紹介が終わったのならとつとと座れ」

「・・・はい」

席がどこか言われなかったしとか、教諭が話し始めたからなどの言い訳は言わない。言ったらさらに叩かれるだけだと、俺の経験が告げている。

「お前達のランクなどゴミだ。私から見たらどれも平等にひよつこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣をつけようとするな」

さすがにオルコットも、千冬さんにそういわれては反論の余地もない。何か言いたそうな顔をしているが、結局言わずに黙っている。

「代表候補生でも、元軍人でも、一から勉強してもらう。下らん揉め事は十代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しろ」

「・・・はい」

「クラス代表は織村一夏。依存はないな」

「・・・はい」

こうしてクラス代表は一夏に決まった。一夏はまだ不満そうな顔をしているが、千冬さんに逆らえないだろうし、ほうっておいても問題ないだろう。・・・問題は次の時間の模擬戦だな・・・はあ。

第11話 最後のクラスメイト（後書き）

投稿するのを忘れていたので・・・連投となりました。一応刹那のクラスメイトへの紹介、及びオリジナルISの登場です。・・・詳しくは次回となりますが、鬼のような能力だなあ・・・と書いておりました。主人公補正万歳。

第12話 模擬戦

—— 刹那 side ——

「それでは、これよりISの模範飛行及び模擬戦を行ってもらう。
全員ISスーツに着替えて第1アリーナに集合。いいな」
「はい」「はい」

とは言ったものの、俺らはどこで着替えればいいんだろう。．．．
と思ったら一夏が近寄ってきれくれた。

「刹那、急ぐぞ。俺らは空いてるアリーナ更衣室で着替えだ。毎回
そうなるから、覚えておいてくれ」
「了解。んじゃ、急ぐとするか」

そういつて教室から出ると、すぐに地響きを感じ取る。．．．地
響き？

「織斑くん！」

「あ、横に男子がいる！あれが噂の男子ね！」

「織斑くん、紹介して」

．．．ふむ。なんだあの女生徒の数は。軽く廊下を埋め尽くして
いるのだが．．．。

「一夏、これは．．．」

「これも毎回だ．．．俺たちは逃げ回りながらアリーナ更衣室まで
たどり着かなくてはならない」

「ふむ・・・まあ、走るとするか」

そうして、走って逃げて、女生徒を引き離し、追いつかれ、なんとか空いている更衣室までたどり着いた。

「何とかたどり着いたな・・・」

「ああ。じゃ、とっとと着替えてしまおう」

そして着替え終わって第1アリーナへ。すでに女生徒達は集まっていて、千冬さん達もいる。オルコットだけ前に出ているところを見ると、俺達もそっちへ行っただろうがいいだろう。

「さて、全員揃ったようだな。では織斑、如月、オルコットの3人はISを起動してみろ」

「・・・はい」

3人同時に返事をして、ISを展開する。・・・のだが、俺とオルコットの2人はきちんと展開できたが、一夏だけがなかなかできない。まあ、まだ2回目だからうまく起動できなくてもしょうがない。

「わあ・・・如月君のISって黒いんだ」

「織斑くんのは対照的だね！」

「ん・・・まあ、そうだな」

そう、俺のISは黒い。全体的にあまり凹凸がなく、トップスピード時の空気抵抗をなくすためか腕などを丸めると線のように細くなる。が、翼を広げるとかなり大きく広がるのだが、まあそれは戦闘時に説明しよう。

「どうした、織斑。早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ。その2人を見習え」

「いや、そういわれても・・・」

ISの専用機というのは一度フィッティングをするとずっと操縦者の体にアクセサリーの形状で待機している。俺は三日月形のペント。オルコットは左耳のイヤークラス。一夏は右腕のガントレット。・・・なぜ一夏だけ防具なんだろう。

「早くしろ」

いかん、次は一夏が殴られる。しょうがない、助言を与えてやるか。

「一夏、試しにそのガントレットを掴んで頭で展開しろ、と念じてみる。普通にやるよりはやりやすいはずだ」

「あ、ああ。分かった」

実際専用機持ちの先輩達に聞いても、待機状態のISを手で握りながらのほうが集中できる、と言っていた。・・・織斑教諭を見ると、『やれやれ』という感じにため息をついていたが、さすがにまだ一夏にはISの瞬間展開は難しいだろう。

パシユッ！

光が舞って、一夏の体が白式の白い機体に包まれた。どうやらハイパーセンサーやらなにやらも正常に起動されたく、こちらのISにも通常待機状態の周囲の機体を送られてくる。

「さて、まずは模範飛行をやってもらおう。3人共、飛べ。とりあ

えず地上から500mの地点で待機」

「……はい」

そういつて、全員上を向いて飛翔する。スピード的には、俺の機体が一番早いため一気に駆け抜ける。次をオルコット、一夏の順で飛んでくる。

『何をやっている。スペック上の出力ではブルー・ティアーズより白式の方が上だぞ』

『いや、そう言われてもなあ』

通信機で一夏は千冬さんに怒られていた。白式はかなり基本スペックが高い。俺のISよりも全体的に上の能力を有している。……一夏がまだ慣れてないから遅いだけで。

『そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚事態がまだあやふやなんだよ。なんで浮いてるんだ、これ』

『説明してもかまいませんが、長いですわよ？反重力翼を流動波干涉の話になりますもの』

『……わかった。説明はしてくれなくていい』

『そう、残念ですわ。ふふっ』

いやー2人で実に楽しそうだ。俺、いないほうがいいんじゃないか？と思ってしまう。

『一夏さん、よろしければまた放課後に指導してさしあげますわ。そのときはふたりきりで——』

『一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く降りて来い！』

と、下から怒鳴り声が聞こえてきた。どうやら篠ノ之が、山田先

生のインカムを奪ったらしい。可哀想に。

『では、3人とも急下降と完全停止をやって見せる。目標は地表から10cmだ』

『はい』

全員の返事が重なってから、誰が行くかと聞いてみる。

『で、誰からいく？』

『俺は自信がない・・・』

『では、わたくしから。一夏さん、お先に』

・・・俺には何もなしかー・・・まあいいけど。

さすがに代表候補生。きれいに完全停止を決めていた。さて、俺も行くか。

『さて、俺も行くか。一夏、力まず、慌てず、な』

『お、おう』

・・・さて、完全に決める事も出来るが・・・ここはちょっと演出を加えるか。

そう思った俺は、まず飛行するために開いていた背面の翼を体に巻きつけるようにして小さくまとめる。そして、一筋の弾丸のように、急スピードで地面に降下する。・・・下の山田先生を始め、早すぎる降下速度に目を見張るが、問題ない。地面まで後50――

40――30――20、ここら辺か。

ウイングスラスタ

ブースター

背面の8枚の機動翼を開き、推進機を地面に向けて、一気に放出する。これで完全停止も完了。さすがに加速も早い分、停止も早い。この機体は徐々に加速などの微弱な調整が出来ない分、背面の推進機は一度点火すると急激に速度が出る。それを利用すれば、このく

らいは朝飯前だ。周りの女生徒は「おお」と開心しているが、千冬さんだけは出来て当たり前という目で見ていた。・・・いや、まあ当たり前になるように育ててくれた人がこの人なんだけどさ。

『よし、織斑、降りて来い』

『よ、よしっ!』

俺とオルコットが成功したのを見て、アイツもいけると思ったのか、一夏も急速に加速をしてくる。白式の背中にある翼状の推進機から一気に火をつけ・・・ちよつと待て。

ギョーンッ

ズドオオンッ!!!!

・・・激突しやがった。白式も俺の機体と同じように、加速をし始めてからのトップスピードに到達する時間が早い。だからきちんと距離を計算して最大加速でやるか、あるいは推進器の出力を抑えなくてはならない。俺のように何度もやっている人間はともかく、一夏はもうちよつと出力を抑えるべきだった。・・・まあ、いまさら遅いが。

「いつてえ・・・」

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「・・・すみません」

周りからもくすくすと小さな笑いが漏れている。まあ、今のは普通に恥ずかしい。

「情けないぞ、一夏。それでも男子か!」

「いや、そういわれてもな・・・」

「大体だな、一夏。お前というやつは昔から——」
「大丈夫ですか、一夏さん！」

お、ライバル出現。一夏があけた穴に篠ノ之が入ったと思ったらオルコットも続けて入っていった。

「あ、ああ。大丈夫だけど・・・」
「そう。それは何よりですわ」

ふむ。一体どうしたというのだろうか、オルコットは。今朝から何かやたらと一夏の事を気にしているな。・・・惚れたか？

「・・・ISを装備していて怪我などするわけがないだろう」

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがISを装備していても、ですわ。常識ですよ」

「お前が言うか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮をかぶっているよりマシですわ」

おお・・・2人の間に火花が見えるようだ。一夏も間に入れないでおろしている。女に弱いところは変わっていないようだ。

「おい、馬鹿ども。授業の邪魔だ。やるなら端っこでやっている」
「す、すみません・・・」

織斑教諭が間に入ったら、すぐに引いた。さすがに怖いらしい。

「織斑、オルコット。再度ISを展開しろ。次は武器を出してもら
う」

「あ、はい」

「了解しましたわ」

そういつてオルコットと一夏は再びISを展開する。一夏も前回と比べると素早く展開できたため、織斑教諭も何も言わない。

「では3人とも、武装を展開しろ。どれでもかまわん」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし。でははじめろ」

生返事を返す一夏が怒られていた。まあ、武器といわれてもいきなりは難しいかもなー。と、思いながら俺は基本武装であり、この機体の特徴的な装備『ヴィシユヌ』を展開する。

「あれ、如月くんのIS、面白い装備をしてるねー」

「何だっけ、その武器」

「ん？ああ、チャクラムだよ。この機体、『黒月』の第3世代装備『ヴィシユヌ』だ」

そう、この機体は日本製の第3世代機ということになっている。

まあ男の俺の専用機であるこのISの起動実験などは公にはできないため、インドの砂漠でほとんどの実験をやった日本・インド共同開発の第3世代機ということになってはいるが。

そしてその第3世代装備のチャクラム『ヴィシユヌ』。複数召喚することが可能で、遠隔操作など様々な特殊機能がついている。

「ほへーラッキーっの機体ってカッコイイね！」

「ラ、ラッキー？俺の事か？」

「うん、そう！ラッキー！」

どこぞのポ。モンのようなあだ名をつけられてしまった……。まあ、一夏もオリムらしいし、布仏のセンスには期待しないでおこう。

「次は織斑。やってみろ」

「は、はい」

返事はするものの、なかなか形にならない。まあ、武器を所持するイメージなんて一般人には難しいかもしれない。と、そうこう考えていると白式の手には雪片式型が出現した。

「遅い。0.5秒で出せるようになれ」

「ぐっ……。わ、わかりました」

おお……。厳しい事で。まあ、確かに武器を出すまで待ってくれ、とは言えないしな。

「次はオルコットだ。やってみろ」

「はい」

さすがに代表候補生らしく、素早くライフルを展開してみせた。
・が、あの両手を横にするポーズは何とかならないのだろうか。

「さすがだな、代表候補生。——ただし、そのポーズはやめろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な――」

「直せ。いいな」

「――、……。はい」

さすがに反論できないようだった。まあ、いちいち横に展開、前に移動して標準を、だと時間がかかるしな。言われてもしょうがない。

「オルコット、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、はっ、はいっ！」

急に1人だけ2度続けて言われたためにびっくりしていたようだが、すぐに武器の展開に移る。まず今装備しているライフルを収納クローズして——新たに近接用の武器を展開させる。オープン……。のだが、結構時間がかかっている。どうやらセシリアは完全中距離タイプらしい。近接武器を瞬時に召喚できないみたいだ。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。——ああ、もうっ！ インターセプター！」

武器の名前をヤケくそのように叫ぶ。そうしてやっと武器を展開することができた。……どうやら本当に近接武器との相性が悪いらしいな。

「……一体何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ですから、問題ありません！」

「ほう。織斑との対戦で初心者に簡単に懷を許していたように見えたが？」

「ぐっ……。あ、あれは、その……」

「まあいい。次は模擬戦に移る。織斑、オルコット、如月の3名は

ここで待機。その他の者はギャラリー席に移動！駆け足！」
「「「はい！」」」

急な命令にもすぐに応じる。これは優秀というよりは織斑教諭が怖いからしたがっているだけだと思う。

.....

『さて、全員配置についたな？』

『ついたけど・・・織斑先生、俺らどうすればいいんだ？』

管制室から千冬さんが、目の前にオルコットと2人並んでいる一夏から通信で声が聞こえる。

『模擬戦と聞いていますが、誰と戦えばよろしいんですの？』

オルコットからも織斑教諭に質問が入る。どうやら何も聞いていないらしい。

『オルコットと織斑でチームを組み、如月と戦え』

『なっ！？』

『ええっ！？』

2人は驚いてこっちを見てくる。それどころか、ギャラリーの皆さんも驚いてこっちを見上げていた。・・・まあ、代表決定戦をした2人相手に2対1で十分、っていつてるしなあ・・・。

『織斑先生、それはさすがにできませんわ。代表候補生のわたくしが、複数人で戦うなどと・・・』

『安心しろ。お前達なら如月には手も足も出ない』

『むっ・・・』

『なんですって・・・!』

手も足も出ないといわれて頭に來たのか、2人の鬨氣（殺氣？）がこちらに向かう。・・・俺が言っただけじゃないんだけど・・・。

『分かりましたわ、それならば、わたくしも全力でお相手いたします』

『ああ・・・手加減はしないからな、刹那!』

『OK・・・こつちもまあ、なるべく頑張るわ』

とは言っただけのあまりこちらの武装を見せたくない。・・・さて、どうするか。

『それでは、試合開始!』

ビーーーーーッ!

『行くぜ、刹那!』

試合開始とともに一夏が突っ込んでくる。変わりにオルコットは冷静にこちらをライフルで狙いを定めてくる。・・・さて、俺も行くとするか。

まずは背面の推進機^{ブースター}『ガルダ』に火を入れる。これによって凄まじい速度で加速ができるが、さすがに微調整ができない。そのため俺は大抵その横にある8枚の起動翼^{ウイングスラスター}『ハンサ』を展開する。この翼を動かす事で、急加速後の微調整を可能にしているため、翼がなくなると一気に不利になる。

『まずは・・・一夏、お前は後だ』

『何っ!?!』

一直線に向かってくる一夏を見ながら、俺はまず真上に急加速ダッシュして一夏から距離をとりつつオルコットへの道をあける。さらに機動翼を操作して、上を向いていた機体をオルコットの方向に向ける。そしたら再びガルダに火を入れて急加速。その間、時間にして1秒程度。一夏じゃまだ反応もできない速度だ。

『は、速いつ！』

『くっ、ですがこれでどうですの！』

さすがにオルコットはすぐに反応して、特攻してくる俺に狙いをつける。そして、ライフルからビームが発射される直前に、今度はオルコットから見て真横に急加速。その後も狙ってくるが、ハンサをうまく使って避ける。

『避けるだけでは勝てませんわよ！』

『ああ、そうだな。でも、お前は避けていないのか？』

『えっ！？』

オルコットが気づいた時にはもう遅い。俺は持っていたチャクラムを、最初の回避の時にオルコットに投げつけていた。ビームや弾丸なんかと違ってそこまで早くないが、あれは俺の機体の第3世代兵器。投げたチャクラムは俺の意思で遠隔操作できる。

『くうっ！』

『セシリアっ！』

『ブルー・ティアーズの右肩及び右足に命中。シールドエネルギーSE低下。実体ダメージ・低』

ふむ。かすただけか。さすがに反応が早いな。こちらはセシリアの攻撃避けながらの移動だったために、徐々に一夏が近づいてき

ている。・・・次の段階に移るか。

『続けていくぜ！舞い踊れ、ヴィシュヌ！ チェンジフォルム・マツヤ！』

俺は手に2個、4個と続けてヴィシュヌを召喚する。あらかじめ投げてあった最初のチャクラムを会わせて、その数10個。そのうち4個を一夏に向けて、自動機動で追尾するようにして、残り6個の内4個を自動機動で、2個を思念操作でオルコットに向けて動かす。さすがに他の動作もしながらとなると、2〜4個程度しか集中して動かせない。その場合は、敵の機体に対して自動的に追尾するようにもヴィシュヌは設定できる。

『くつ、あまり形が大きくないせいで・・・』

『くそつ、かわしにくい！』

セシリアは動き回る事で避け、ブルー・ティアーズで撃ち落そうとしているが、ヴィシュヌは対ビームコーティングもされているかなり頑丈なものだ。数発なら耐えられる。一夏も避けるが、やはりオルコットと比べると動きが遅い。避けせないものは剣や蹴りで弾いているが、剣はともかく足で蹴飛ばしているとどうしてもSEを削られていく。それでも直撃よりはましと、なんとか回避をしているが、俺との距離は開いていく。

『さて、2人とも。避けて見せる』

『えっ！？』

『まだ何かあるのかよ！』

俺は背部のハンサの中から左右一对の砲身を出してくる。それは丁度俺の肩の上でとまり、正面にいる2人を照準にいれて固定する。

『さあ、行くぞ！』

『くっ！』

『ちくしょう！』

そして砲身が火を噴いた。こいつは電磁砲塔『ヴァジュラ』。電気の力を使って磁力の反発を元に弾丸を撃ち出す電磁砲塔。その速度は通常の弾丸の比じゃない。まさにビームのように音速で飛来する弾丸は、まず避けられない。

『まずは一夏、お前からだ！』

ゴウッ！ゴウッ！

『くそっ！避けきれない・・・！』

『一夏さん、下がってください・・・！一旦距離を——』

『とらせないための、ヴィシユヌだ。一気に攻めるぞ！』

俺はヴィシユヌ4機を思念操作に切り替え、それぞれ2機ずつでオルコットと一夏を追い込む。さらに一夏にはレールガンの連射というオマケをつけて、より激しく攻撃していく。右肩、左足、左腕、右足。どんどん装甲を破壊され、白式の装甲は剥ぎ落ちていく。それに応じて、SEもがんがん削られていくが、一夏は遠距離攻撃を持たないので、何も出来ない。

『くそっ！一か八か・・・！』

一夏の翼の推進機にエネルギーが集まっていくのを感じる。——
『瞬間加速』か。さすがに音速を超える速度で接近されると俺も辛い、だが・・・まだ甘い。

『いつけえ！』

ドゴウツ！

白式は推進機に集めたエネルギーを全て開放して、まさに音速と読んでいいほどのスピードで飛んでくる。しかし、動きは直線的。来ると分かっている以上、こちらとしては狙いやすい事この上ない。

『一夏、この状況で瞬間加速は愚策だぞ！まっすぐ突っ込んでくる以上、撃つてくれと言っているようなものだ！』

俺はレールガンを連続で打ち込む。が、一夏は零落白夜を発動させた剣を前に突進してきているため、半分以上が零落白夜のエネルギー刃に当たって切れてしまう。・・・仕方ないか。

『うおおおおっ！』

『——まだ甘い』

ガキイインツ！

『えっ！？』

『なんですの！？』

・・・あと少しで零落白夜が俺に届く、という直前で一夏の動きが止まった。というより構えていた雪片が『壁』に阻まれてとまっていた。

『ヴィシユヌの第2の能力・・・チェンジフォルム・クールマ』

ヴィシユヌには10の特殊形態がある。基本形態でありながら、近接戦闘用の第7形態 ラーマ。複数召喚・投擲した後に遠隔操作する第1形態 マツヤ。そして複数のチャクラを重ねる事によって盾にする、あるいは複数のチャクラにエネルギーを通す事で巨大なエネルギーシールドを作り出す クールマ。零落白夜が

あるから今回は物理シールドとして使ったが基本はエネルギーシールドで全ての攻撃を弾く事が出来る。・・・が、これらの能力を使うとSEを著しく消耗する。現に今の俺のSEは一撃も喰らっていないのに490。能力を使っているだけで実に110も消費している。なので攻撃を外しまくると返ってこっちの消耗のが増えていく。零落白夜と同じように、こいつは諸刃の剣だった。

『零落白夜か・・・確かに厄介な能力だ。しかし、物理シールドで受け止めれば・・・数秒は持つ』

『く、くそっ・・・』

ビシッ、ビシシッ・・・

『さて、壊れる前に終わらせるか。・・・ヴィシユヌ、チェンジ
フォルム・ナラシンハ』

第4の形態、ナラシンハ これは複数召喚したチャクラムを俺の周囲で回転させることで近距離の敵を攻撃するフォルムだ。しかも現在召喚しているチャクラムまで高速で俺の周囲まで戻ってくるため、戦闘が後半になって、召喚してあるチャクラムが増えれば増えるほど、痛いカウンターを与えられる。

『な、なにっ!??く、うあああっ!』

バシユッ!バシユシユッ!

『一夏さん!』

一夏の残っていた装甲も全て切り裂かれ、SEも0になる。ISが最後の力を振り絞って、地面までは解除されなかったが、一夏が地面についたと勝手に強制解除された。

『くそおっ・・・!』

『お、織斑機、戦闘不能です・・・』

『後はお前だな・・・オルコット』
『くっ・・・!』

さて・・・悪いが一気に決めるかな。

「す、すごいね、如月くん・・・」

「う、うん・・・セシリアと織斑くんの2人がかりでも攻撃をかすりもさせないだなんて・・・」

「というか、強すぎ？」

ギャラリィ
外野ががやがやと言っているが、今の俺には聞こえない。クール
シャープ
鋭くに敵を切り裂く刃となるように俺は仕込まれている。

『ヴィシユヌ・チエンジフォルム・マツヤ!』

再び遠距離操作でセシリアを追い込む。しかも今回は、一夏に向けていたチャクラムまで送り込む。その数、10機。一夏の零落白夜を受け止めるために使った2機は完全に機能停止しているため収納した。・・・一気に決めるか。

『オルコット。中距離型を名乗るのなら、俺の射撃も避けきつて見せろよ?』

『え、ま、まだ何かあるんですの!?』

俺は背中中のレールガンに加えて、新たに手に武器を召喚した。エネルギー状の矢を射る弓『ピナーカ』だ。さすがに連射性はそこまでないが、ライフルなどと比べて比較にならないほどに本人の技量が生きてくる。俺はどうやら弓の才能があつたらしく、かなりの的中率を誇る。

『チャ、チャクラムに加えてレールガン……！それに弓って……！』

『俺の機体、『黒月』は中距離殲滅型……お前と同じだ！』

そういいながら俺はチャクラムを操作しながらレールガンと弓を放ち続ける。さすがの操縦技術で、いくつかのチャクラムをライフルとブルー・ティアーズのビットとミサイルで叩き落されたが、結局俺の体には一撃も直撃できないままオルコットのSEは0シールドエネルギーになった。……俺の勝ちだ。

第12話 模擬戦（後書き）

と、いうわけでオリジナルISです。フリーダムのような高機動性能。豊富な遠距離攻撃と近距離／中距離の第3世代武器、とまあチートです。でもまあ自動なら第3世代武器じゃなくてもあるかな、と思っていたりしたのでそこまで強くはなかったり。まあ10の特殊形態を持っている時点で反則ですが。

今回出さなかった特殊形態は後々出していく予定です。なお、インドの砂漠がどうたら〜というのはISの武装を考えていた時になぜか思いついたのがインド神話の神々の名前だったため、統合性を持たせるために日本とインドの共同開発、となりました。それ以外の深い意味はありません。

・・・できれば日本の神の名前などを使ったかったのですが・・・
良く分からなかったのでw日本の神は難しいです・・・。

第13話 転校生はセカンド幼馴染

―― 刹那 side ――

「模擬戦終了だ。全員、アリーナのグラウンドに出ろ」

織斑教諭の一言で、ギャラリー席にいた女生徒が再びアリーナに入ってきた。俺もISを解除して、そこに近づいていったが、なにやら彼女らの目がおかしい。・・・キラキラと輝いている気がする。

「如月くん、どうしてそんなに強いのか？」

「日本とインドの共同開発なんだって！？どうしてそんな機体を持っているのか？」

「ねえねえ、やっぱり強いのは、軍隊にいたから？それとも何か別の――」

「黙らんか、馬鹿者ども」

スパパパーンッ！

俺に押しかけていた女生徒達の頭を出席簿で叩く。実にいい音がしたが、とりあえず俺のISの説明をしなければいけないかなーと思っていたら教諭2名が説明を開始してくれた。

「では、如月のISについて教えておこう。山田君」

「あ、はい。えっと如月くんのISはですね。機体名称『黒月』^{こくげつ}。

日本とインドで共同開発されていた第3世代機です。その特徴は、チャクラム状の武器『ヴィシユヌ』^{ヴィシユヌ}にあります。この武器は、10

^{シールドエネルギー}

の形態を持っていて、それぞれSEを消耗して様々な能力を持つ事に成功しています。例をあげますと、第1の形態 マッヤ。これ

は複数個のチャクラムを召喚して、遠隔操作できる形態ですね。自

マニョアル
動追尾と思念操作の2種類のモードがあり、最大で12個まで召喚
できるそうです」

「え！？12個！？」

「すごい！強いよ！」

「そんな機体、ずるいよ」

マニ
なにやら周囲の女生徒が騒ぎ出したが、結構大変なんだぞ。思念
ユアル
操作だと疲れるし、神経使うし、数が多くなればそれだけSEの消
シールドエネルギー
耗も増える。結構管理が大変なんだ。それに12個といっても全
の武装で共通で12個までだから、そこまで多く飛ばせるわけじ
ない。

「えつとですね、12個というのはどうやら全ての形態で共通の数
だそうです。なので他の形態で使っていたり、あるいは破壊されて
いると数は減ってしまうそうですね」

「はい。現に今の俺のヴィシユヌの数は7個になっています。これ
はきちんと修理しないと回復はしません」

本来は無制限に搭載しようとしたらしいが、12個が限界だった
そうだ。それ以上乗せると他の機能を圧迫してしまうため、12個
というのが現状最もバランスがいいらしい。

「そのほかに特徴的なのが背面の巨大な推進機ですね。名称は『ガ
ルダ』。これにもSEをまわすことで、超加速できるそうです。そ
ウイングスラスタ
して背面横の機動翼『ハンサ』。8枚からなるこの翼を広げる事
によって、微調整が不可能な『ガルダ』を使用した超加速後の硬直中
にも動けるようになり、高機動戦闘を可能にしているそうです。こ
スラスタ
の翼1枚1枚の先にも小型推進機が内臓されていて、それによって
機体の向きを調整したりしているみたいです。全体的にバランスが
いい機体ですね」

「しかし当然、弱点はある。『ハンサ』及び電磁砲塔『ヴァジユラ』
以外の全ての動き、武装にSEを消費する。シールドエネルギーそれらを管理できなければ、高性能水準のこの機体は動かせん。長期戦に向かないという
ものもあるな」

そう、基本的に零落白夜以上にSEを消耗する俺の機体は、はつきりいつて激しく燃費が悪い。ただでさえ、『ヴィシユヌ』の運用時にエネルギーを使うのに、移動にすら使うとなるといくらなんでも普通にSEが切れる。シールドエネルギーだから俺は基本的にほぼ動かない中距離、遠距離で敵を近づけさせない戦闘方法をとる。そうじゃないと確実にこちらのエネルギーが先に切れるからだ。

「今回の織斑とオルコットの敗因は、連携が上手く言っていなかった
事と、相手の機体性能をきちんと聞いていなかった事だ」

「で、ですがそれは聞く前に戦闘を開始したからで——」

「試合開始前に聞けばよかっただろう。何のためにわざわざ3人ここに
残したと思っている。それに私が試合開始の合図をする前に情報開示を願えばよかっただろう。頭に血が上っていて何も言わなかったのは誰だ？」

「ぐっ……」

「今回のように敵の情報不足で負けるといふのは技術以前の問題だ。
必ず敵の情報を確認すること。いいな」

「……はい！」「」

「では、本日の授業はこれで終わりとする……ああ、それと織斑」

「？はい」

「地面の穴を埋めておけよ」

「……はい」

可哀想に。負けて疲れているところをやらされるのか。仕方ない
から俺も——

「如月、手伝うなよ」
「・・・はい」

すまん、一夏。俺は手伝えない。捨てられた子犬のような目で俺らを見つめてくる一夏を1人残し、俺は着替えるためにアリーナ更衣室に戻った。

—— 一夏 side ——

どうにかグラウンドの整備を終えた。急いで着替えて、アリーナ更衣室を出たところで箒が待っていた。

「あれ？箒、教室に戻ったんじゃないのか？」

「う、うむ。少し用事があったな」

「そうか。終わってるなら教室に戻ろうぜ。それともまだかかるのか？」

「い、いや。もう用事は終わっている。よし、戻るとしよう」

・・・？変なやつだな。・・・まあいいか、と思い直して俺は教室に駆け足気味で戻る事にする。

—— ??? side ——

「ふっん、ここがそうなんだ・・・」

IS学園の正面玄関の前に1人の少女が立つ。小柄な体に不釣り合いのボストンバックを持ち、左右それぞれを高い位置で結んであるあでやかな黒髪が特徴的な少女だった。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

真新しいIS学園の上着のポケットから一切れの紙を取り出す。くしゃくしゃになったそれは、少女の大雑把な性格と活発さを非常に良くあらわしていた。

「本校舎一階総合事務受付・・・って、だからそれはどこにあんのよ」

文句を言いながら紙を上着のポケットにねじり込むことで紙はさらくしゃくしゃになっていたが少女はもちろん気にしている風もなく、当てもなく校舎に向かって歩き始めた。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

ぶつくさいいながらも足を動かす。考えるよりも行動、というのが少女の基本スタイルで、よく言えば『実践主義』、悪く言えば『良く考えない』少女であった。

もうすぐ校舎に着く、というところで向こうから1人の男子が歩いてくるのが見えた。丁度いいので目的の場所を聞くべく、少女はその男へと近づいていった。

—— 刹那 side ——

「参った参った・・・通信機を忘れるとは」

今朝盾無さんからもらったばかりのイージス専用の特殊通信機をアリーナ更衣室に忘れてきてしまった。盾無さんに『なくしたらおしおきだよ』と言われていたのに、もらって数時間でなくすとか洒落にならない。いつ任務が入るか分からない以上、すぐに回収

しておかないと盾無さんに知られたらおしおきを超えたレベルの『おしおき』をされてしまう。・・・と、駆け足というよりも走る勢いでアリーナ更衣室に戻る俺に急に声かけられた。

「ちよつと、そのアンタ。道を聞きたいんだけど？」
「はい？」

IS学園で道を聞かれるとは思わず、間抜けな返事を返してしまった。一体誰だろう、と思ってそちらを見ると、知った顔が待っていた。

「あれ、鳳じゃないか」
「へ？・・・あ、あんた、刹那！」

誰かと思ったら鳳だった。鳳^{ふうりん}鈴音。確か今では中国の代表候補生だったはずだ。・・・1年ほど前に急にIS適正の高さから中国政府に見出され、1年で一般人から代表候補生までの上がった恐ろしい人物。でも確か俺が旅立つまで日本にいたはず。一夏のクラスメイトでだったはずなんだよな。・・・1年前に引越したんだろうか。

「何でアンタがここにいるのよ！」
「あれ、今朝のニュース見てないのか？」
「は？ニュース？」

「俺、（表向きは）世界で2番目にIS動かした男ってことになってるから、IS学園に入学することになったんだよ。といっても俺もついたの昨日だけど」

「え、ええーっ！？IS動かせる男って一夏じゃないの！？」
「一夏が1人目で俺が2人目。ニュースくらい見ておけよ、代表候補生」

どうやら今朝のニュースは見えていなかったらしく、凰はひどく驚いている。まあ、今学園にたどり着いたという事は、直前まで移動の連続だっただろうし、見る暇もなかったか。

「ほ、ホントだ……。何でアンタまでIS動かしてんのよ!」
「それはひどい言いがかりだ……」

俺だつてできることならIS動かしたくなかったんだけどなあ……。と思つてしていると凰が新たな反応を見せた。

「つて、何でアンタ、私が代表候補生つて知つてるのよ」
「いや、俺今まで軍にいたから。どうしてもそついうのに詳しくなつてるんだよ」

「は?軍?……。3ヶ月くらいでいなくなったと思つたらアンタ軍属になつてたの?」

「ああ……。まあ、成り行きでな」

俺の人生、全てが流れに乗つていつか、成り行き任せになつてる気がする……。そろそろ自分の意思で選びたいところだが、無理かもしれないな。

「まあいいや……。じゃ、アンタでいいや。総合事務受付つてころに案内してよ」

「え?……。いや、俺今からアリーナ更衣室に——」
「いいから案内しなさいよつ。この学園、ただでさえ広くて道がわからないのよ!」

まあ、確かになかなか広いが軍施設の迷路のような通路に比べるとぜんぜんマシだと思う……。思つたけど口には出せないのだし

ようがないから了承しようとしたら、廊下のほうから声が聞こえてきた。

「大体お前は剣の使い方がなっていない！だからさっきもあんなふうに・・・」

「いや、刹那相手だからしょうがないだろ？アイツ、めちゃくちゃ強いぞ」

「その軟弱な思考からして負けているのだ！全く・・・」

・・・なんか横の凰から凄まじい闘気がもれている。俺、逃げた。

「・・・今の、一夏よね？」

「あ、ああ」

「・・・隣の、誰？」

「えーあー・・・篠ノ之と言ってだな、その・・・クラスメイトだな」

「ふーん・・・ずいぶん親しそうね」

「あー、どうやら篠ノ之は一夏の——」

「いい、本人から聞き出すから・・・早く総合事務受付に案内しなさい。・・・終わったらすぐに会いに行くから」

「ヤ、了解^ヤ」

静かにキレた時の織斑教諭の次くらいに恐ろしい。女というのは皆怒ると怖いのだろうか。

——その後俺は、凰を総合事務受付まで連れて行って分かれた。『2組の代表は』とか『変わってもらう』とか聞こえてきたが、受付の人の怯えた声を聞くと、相当おっかない顔をしているのだろう。触らぬ神に祟りなし。放置して俺は教室に戻った。・・・あ。通信機取って来てない・・・。盾無さんにバレないといいなあ・・・。

。

— 夏 side —

「それでは、休憩時間に入る。あまり騒ぐなよ」

「起立、礼」

「「「ありがとうございます」」」

どうにか遅刻せずにすんで、（刹那は俺の後に走ってきたが結局遅刻になったので叩かれていた）今の時間のIS基礎理論の授業が終わった。相変わらずよく分からないものの、横にいる刹那が色々と小声で教えてくれるので、一応は理解できるようにはなっている。・・・千冬姉も仕方がないと思ってくれたのか、今は見逃してくれている。

「そついえば一夏、さっきの休み時間に——」

「ねえねえ、織斑くん、如月くん、聞いた？ 転校生の話」

「えーと、あー、転校生？」

「うん、そう。2組に転校生が来たらしいよ？」

「転校生ねえ・・・まだ4月の半ばだっていうのに転校つてのもおかしい気がするな。・・・って、刹那。なんか言いかけてなかったか？」

「いや、いいわ。先に言われたらあいつも怒る気がするし。本人が来るまで放っておく」

「?・・・そうか？」

良く分からないが刹那の話はいらしい。それならば、と転校生の話に戻ろうとする・・・が、その前にセシリアが話しに入ってきた。

「あら、わたくしの存在をいまさらながらに危ぶんでも転入かしら」

相変わらず腰に手を当てたポーズが似合う。イギリスの人って、もしかして全員このポーズが似合うように出来ているんだろうか？

「どんなやつなんだろうな」

「む・・・気になるのか？」

「ん？ああ、多少は」

「ふん・・・お前に今、女子を気にしている余裕があるのか？今月末にはクラス対抗戦リーグマッチがあるのだぞ」

「あー・・・そんなのあったなあ」

そう、今月の最後にはクラス対抗戦リーグマッチというのがある。これはクラスの代表者同士で戦い、現在のクラス単位の実力指標を作るためのものらしい。また、クラス単位での交流及びクラスの団結のためのイベントだそうだ。

「まあ、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんか！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよー」

「学食デザート半年フリーパスのために！」

「がんばれーおりむー」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って1組と4組だけだから、余裕だよ！」

やいのやいのと騒がしい女子一同の頼みを断りきれず、「お、おう」とだけ返事をする。

「——その情報、古いよ」

ん？教室の入り口から声が聞こえたので視線を向ける。・・・なんか、すげえ聴いたことのあるような声だが・・・。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴・・・？お前、鈴か？」

そこには見慣れたセカンド・幼馴染。凰鈴音が立っていた。・・・が、無理に格好をつけているせいですげえ似合わない。刹那も違う方向を向いて密かに笑っているし。

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「何格好つけてるんだよ。すげえ似合わないぞ」

「んなつ・・・！？なんて事いうのよ、アンタは！」

おおやつと普通のしゃべり方に戻った。なんださっきの気取ったしゃべり方は。軽く引いたぞ。

「おい」

「何よ！」

バシンッ！

「もうチャイムは鳴っているぞ。とっとと教室にもどれ」

おお、いつのまにやら千冬姉が来ている。どうやら話に熱中している間にチャイムがなっていたらしい。普通に返事をしたことで鈴も頭を叩かれている。

「ち、千冬さん・・・」

「学校では織斑先生と呼べ。邪魔だ、退け」

「は、はい・・・」

さすがに鈴も千冬姉には逆らえないらしく、素直に道をあけた・・・
・と思つたらこつちに指を刺して宣言してきた。

「後でまた来るからね！逃げないでよ、一夏！」

「とつとと戻れ」

「は、はい！」

今度はぶたれると思つたのかすぐに教室に戻っていった・・・
やれやれ、いつ日本に戻ってきたのか。また騒がしくなりそうだな。

第13話 転校生はセカンド幼馴染（後書き）

鈴登場。次は瞬間加速の^{イケニッションブースト}ことを説明しようかなーと思っています。
感想・アドバイス等あれば送ってくださいと嬉しいです。

【追記】どうも、お久しぶりです。しばらく更新が難しいと思います・・・。と、いいますのも一応家は東京なのですが実家が東北の方ですので・・・。それに加えて計画停電などもあるのであまりPCや携帯電話を使用できない状況にあります・・・。なので早くても4月後半くらいまでは更新できないかと・・・。ちょこちょこ書いてはいるのでもし更新できるようなら更新いたしますので、長い目で見ていてくれると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1310r/>

IS <インフィニット・ストラトス> Black and White

2011年10月8日19時12分発行